中国語

一　唐通事の担った初期中国語教育　―南京官話から北京官話へ

1　黎明期

中国語学研究の黎明期

本学の東アジア課程中国語専攻は、その源を求めると、長崎の唐通事に発している。明治の初期、東京外国語学校が開学したとき、漢語学科の教授陣は、長崎から迎えた頴川重寛を筆頭にした唐通事からなり、生徒の多くも長崎出身の通事の後裔たちが占めていた。

鎖国の続いた江戸時代、日本が海外に開いていた窓口には長崎口、対馬口、琉球口、松前口の四つがあった。このうち長崎は正規の開港地としてオランダ、中国と交易が行われて諸外国の文化の伝来する門戸であった。唐通事とは、中国との通商貿易のために活躍した「訳司」のことである。かれらの祖先は中国人であり、日本に帰化して平戸や長崎に定住したものの子孫であることが現存する記録文書『訳司統譜』によってわかる。阿蘭陀通司（オランダ語の訳官）のルーツも、もとはと言えば唐通事からの転向であったものが少なくない。唐通事から分かれて「暹羅通事」

「東京通事」などの異国語の通事も存在した。長崎には訳司として活躍する名家があった。長崎奉行の下に置かれた訳司の地位は、いわば外国語に秀でた翻訳官であり、実務能力をもった商務官であった。しかもその技能は世襲であり、家職であった。代々優秀な後継ぎをえることが難しいために養子によって家を嗣がせることも珍しくなかった。

長崎の蘭学は阿蘭陀通詞を除外しては考えられない。通詞のなかには外国語の知識を家学として錬磨し、医学、天文学、数学等、諸学術や文化を専心研究して学究となったものも少なくない。唐・蘭通詞は幕末期に至り迫りくる欧米先進国の外圧の下、鎖国政策による封建体制のはらむ危機のなかで、ロシア語・英語・フランス語を学び、幕末外交に重要な役割を果たした。幕府による天文方の「蕃書和解御用」なる翻訳局の設置は、東京外国語学校の開業の起因となるのである。長崎の通事とその後裔たちは、明治以後、東京でそのもてる語学の力を十二分に発揮することになる。

一八七三（明治六）年十一月四日東京外国語学校は開学した。漢語学科の母胎となった外務省の漢語学所では旧藩にも呼びかけて生徒の募集を行った。長崎の通事の後裔たちに混じり、漢学の伝統のある藩校から選出された優秀な学生たちは唐通事の先生の教導の下、「南語（南京官話）」を学ぶのである。

だが、長崎から東京に移り、「南京官話」の習得を目標とした唐通事の伝統的な教育は終焉が近づいていた。日本と清国との関係がいよいよ深まる中で、北京官話の重要性はそのときすでに十分に認識されていたのである。東アジアの時代の潮流の中で南京官話の地位の失墜を如何ともしがたかった。

一八七六（明治九）年九月、公教育としては日本ではじめて東京外国語学校で北京官話教育が実施されることになる。この時、唐通事の系譜とは外れた教師の中から、水戸藩出身の川崎近義のごとく、漢学の素養を十分にもちあわせつつ、来日の北京人客員教師をインフォーマントに現代の記述言語学の先駆をなすような精密な音声分析の記述を

残した異能の日本人教員が出現するのである。川崎近義の存在は明治期の中国語教育史を掘り下げて研究した一研究者によって最近ようやく明らかにされたばかりである。川崎近義による北京方言の超文節音素に関わるストレス・パターンの発見は、この方言を最もユニークたらしめている音韻特徴をいち早く認識した言語学者として永くその名を記憶されるべきであろう。それは時代を隔てて現代の、各種の中国語辞典や中国語学習書の中で採用されている軽声の記述方法の原案というべきものであったのである。

東京外国語学校漢語学科では、従来までのものを「南語」とし、主として「北語」すなわち「北京官話」が教授されることになった。北京官話習得のために選抜された生徒の中国留学が実現して、現地に渡り研鑽を積ませる策が推し進められるのは一八七六（明治九）年以降である。中田敬義や御幡雅文のごとく、留学体験をもった生徒の中からは、明治初期の中国語研究史を飾るにふさわしい成果を招来させたものも少なくなかった。かれらは帰国後、多くは中国語の教師としての道を歩むことになる。

東京外国語学校は一八八五（明治十八）年に東京商業学校に合併されて廃校となり、一八九七（明治三十）年の復活まで、一二年間の中断が続いた。公教育での中国語教育の唯一かつ中心的存在であった東京外国語学校漢語学科の消滅は遺憾極まりないことであった。だがこの時期、日本の中国語教育は再び唐通事のふるさと長崎にもどり、公立の学校で復活を遂げ存続していた。長崎は東京外国語学校漢語学科の初期の態勢を創り出した源泉である。明治の東京に注ぎ込んだこの唐通事の泉は涸れることなく、この中断の時期にも長崎出身の先輩諸兄の努力によってもちこたえた。

「北に鄭あり、南に御幡あり」とは、一八九七（明治三十）年ごろ中国語学界で口々に称賛したものだという。鄭というのは鄭永邦のことで、御幡とは御幡雅文のことである。二人はその時代の中国語の両巨頭とまで言われた。鄭

永邦は鄭幹輔、鄭永寧と続く唐通事の家柄。東京外国語学校に学び北京に留学、金国璞について研鑽を続け、呉啓太とともに『官話指南』を著して日本の中国語学界に貢献した。鄭永邦は北京公使館の通訳官として勤務し、日中両国の国際的な交渉の場に多く関係し、その優れた技量の程が今に伝わっている。鄭一族の名は、一八七一（明治四）年の日清修好条規、通商章程の締結に際し日本側代表団の通訳として随行、国交の樹立に尽くし、その後も長く日中外交交渉に活躍した父の鄭永寧とともに今も長崎の人々の記憶に残っている。「南」の御幡雅文は、一時郷里長崎で教鞭をとった後上海に渡り活躍の場を見出した。御幡雅文の名は『華語跬歩』をはじめとする先駆的な中国語教科書の編者として、また熱意溢れる中国語教育者として忘れられることはない。

明治初期、中国語学研究の黎明期にあって、われらが先輩先学は好学の士であった。かれらは、その課題たる中国語口語へのあくなき興味を抱きつつ、北京官話はもとより上海語や台湾語のごとき南方方言に至るまで精度の高い研究を行った先駆者であって、絶えざる研鑽と教学の中でその普及に努力し、後学への大いなる学問的遺産を残した。

2　東京外国語学校の開学と漢語学科

東京外国語学校の開学

幕末の外国語にかかわる機関は、幕府の天文方（一六八四［貞享元］年）、蕃書和解御用（一八一一［文化八］年）、洋学所（一八五五［安政二］年）、蛮書調所（一八五七［安政四］年）、洋書調所（一八六二［文久二］年）、開成所（一八六三［文久三］年）と変遷した。

これは、嘉永六年のペルリの率いるアメリカ艦隊渡来によって江戸幕府が大きな影響を蒙り、幕政の改革の端緒を

もたらし、従来長崎奉行に任せられていた対外事務が、直接幕府の関わる重要事となったためであった。幕府は天文方附属の蕃書和解御用の拡大と強化を計画し、官設の洋文翻訳兼教授所の創設を望み、正式には「蕃書調所」と命名されて開所したのであった。アメリカ総領事ハリス（Townsend Harris）が上府の際、宿舎にあてられたという蕃書調所（ハリスの滞在記には'office for Examination of Barbarian Books'と記されている）は宏壮美麗であったという。地下鉄半蔵門線九段下駅下車、歳月を経てその場所を訪ねると、壕の「牛が淵」のそばにあり、今その跡地には「昭和館」（戦没者慰霊館。一九九九［平成十一］年三月オープン）が建っている。かつてそこに建てられていた「蕃書調所跡」の碑は現在は隣の交番の傍らに移されてしまった。

さて、一八七二（明治五）年の学制発布から以降、明治政府の施策は多くの試行と模索を重ねながら高等教育の条件を整えつつ諸教育機関が育成されていった。政府は既設の専門教育機関を充実させ、外国語の学力をつけて大学での専門教育を受けることが可能になるように、外国語学校、英語学校などと改称させながら大学予備教育機関がつぎつぎと設置改廃された。

一八六八（明治元）年開成所を復興して開成学校とし、医学校の大学東校を分局とした。翌七三年昌平学校（旧幕府による官学校の昌平坂学問所。もと林羅山の私塾、昌平黌）を「大学校」とした。開成学校では英仏二語学科を置き、ついで独語学科を置いて七一年には南校と改称した。洋学教育機関たる南校はその翌年に学制が布かれて第一大学区第一番中学と改称せられ、七三年再び「開成学校」と言う名称にかわった（明治七年以降は「東京開成学校」と称された）。『東京帝国大学五十年史』（一九三二年）の編纂作業に従事した大久保利謙は、この間の複雑で紆余曲折をへた変転を

大学校は幕末の官学と明治の大学との、いわば分水嶺ともいうべき存在です。明治新政府は、旧幕時代は全く別々の存在であった昌平坂学問所・開成所・医学所の三官学を接収し、これに京都の朝廷政府のもとにあった皇学所・漢学所の後身、大学校代とを合流させました。これが大学校です。つまり、国学、漢学、洋学の三学総合という独特の総合大学だったわけです。復古と維新というイデオロギーを体現した総合大学といえましょうか。しかし、……すぐ、国学と漢学派の激烈なヘゲモニー争いを引き起こします。わずか一年にして分裂自壊……ところが洋学系は別世界で、かえってこの自壊のなかから、分校であった大学南校・大学東校が発展していって、やがて東京開成学校と東京医学校になる。そしてこれが合同して、明治十年の東京大学になるわけです。つまり、幕末の開成所・医学所からストレートに東京大学につながったわけではない。いったん国学・漢学系の大学校に吸収され、それが崩壊したことによって復古主義と儒教理念が精算され、洋学系の大学南校・大学東校が新時代の大学の土台となったわけです。（『日本近代史学事始め―歴史家の回想―』岩波新書、一九九六年）

と明快に説いている。

開成学校はすでに法学、理学、諸芸、鉱山、工業の専門学科を合わせた実質「大学校」（大学設立の計画はこのときまだ実行を見ておらず、開成学校は、実は中学にもあらず、また大学にもあらず中間に位置づけられていた）であり、外国語教育もこれと平行して行われていた。

この開成学校の「語学生徒」（開成学校に専門学科が設けられ、そこに進級した生徒を下級の「語学生徒」に対して「専門学生徒」といった）が東京外国語学校の核となり、第一大学区第二番中学の後身たる第一大学区独逸学教場、それに外務省の外国語学所の後身たる独魯漢語学所を収管して、一八七三（明治六）年五月外国語学校に合併した。開成学校は同年八月に新築成り、「専門学生徒」はそこに移った。開成学校の旧校舎が外国語学校に充てられた。設立直後、開成学校は専門学科で学ぶ媒介言語の種類に関して選択を行い、主として経費がかかるとの理由で専ら英語を以て教授するとの決定をしている。これにより、仏語独語で学習を続けてきた生徒には特別の計らいをとらざるを

得ないことになった。

こうして開設された外国語学校は、その当初開成学校外国語学校ないし開成学校語学教場と呼ばれていた。開成学校から分離独立し、官立の東京外国語学校と称し、一ツ橋通町一番地に開設されたのは、一八七二（明治五）年八月学制発布後の翌七三年十一月四日からである。開成学校副校長、伴正順が兼任して東京外国語学校の初代校長に就任（一八七四年四月退職）。英仏独魯漢の五つの外国語を教授することになる。英語科のみは七四年十二月に東京外国語学校から分離して東京英語学校となり、七七年には当時の最高学府である東京開成学校に直結する東京大学予備門として附属させた。同年四月には東京開成学校及び東京医学校は合併して東京大学と改称し、法学、理学、文学の三学部によって構成された。

内村鑑三、岡倉天心、新渡戸稲造、大島正健らがこの時代に東京外国語学校を経て、東京英語学校に学んでいたことは人も知るところである。ここでは言語学者の大島正健に焦点をあてよう。

大島正健は一八五九（安政六）年、現在の神奈川県海老名市に生まれた。一八七五（明治八）年東京英語学校入学、その後札幌農学校に進学してクラーク博士の薫陶を受けた。正健の札幌行きは、そのまま進めば、大学予備門を経て東京大学へ行けるというコースを捨てての選択であった。正健らアンビションに燃えた青年たちは「屍を北辺にさらす」という意気込みで未開の地、北海道に集まったといわれる。明治の生んだ三大英文家として、岡倉天心、内村鑑三、新渡戸稲造の名が挙げられるが、正健も英文に抜群の才があった。正健の学問上の関心は言語学にあり、その後の仮名遣いや漢字に対する研究は中国古代の音韻学研究へと及んでいき、一九〇四（明治三十九）年には「古韻の研究」という論文を当時の京都大学に学位請求論文として提出した。この論文は十年余り棚上げにされたままになり、京大文学部の審査を経て文学博士の学位が正健に届いたのは提出後二二年目の一九二八（昭和三）年のことであった。

後年正健の研究は『支那古韻史』（冨山房、一九二九年）となって刊行されたが、それは古希を迎えた正健七十歳の秋であった。詳細は『大島正健―生涯の軌跡―』（海老名市叢書四　神奈川新聞社出版局、一九九六年）を参照されたい。大島正健の学問を継承した唯一の弟子、飯田利行（宗教家、言語学者）に「私の見た音韻学者大島正健先生」（大島正健・大島正満・大島智夫補訂『クラーク先生とその弟子たち』新地書房、一九九一年）の好論文がある。

中江兆民の漢学重視

ところで東京外国語学校の学校長は伴正順についで、柳本直太郎、辻新次（旧信州松本藩士。蕃書調所でフランス語、オランダ語を修めた。「仏学会」［一八八六年設立］の首唱者の一人。維新後は大学南校校長、文部大臣書記官、文部次官等を歴任。貴族院勅選議員。外国語学校長の在職期間は一八七四年四月から七五年二月）、ついで中江兆民（篤助、のちに篤介）が一八七五（明治八）年二月二十三日就任、五月十四日辞職している。三か月たらずで辞職したのは、中国の古典を重視し、西洋語以外に漢籍の類を教えて儒教教育を行おうとしたことに対して文部当局と衝突したからであった。

兆民は言う。

漢字の全廃果たして成就すべきや、是れ将た一問題なり、……余の職を外国語学校に奉ずるや、西洋語の外に尚ほ一方には十八史略、史記という類のものを授けんとしたるに、当時福沢氏は熱心なる漢字滅宿論者なるにが九鬼氏は全く之に同ず、余仍つて反対して云ひけらく、泰西においては羅甸、希臘の死文字あり、然るに尚ほ依然として之を学術の用語たらしむるのみならず、普通語の中も之を混和して而して全く之を除去するを得ず、日本に於ける漢字亦然り。「兆民居士の文学談」

兆民の教育実践の考えは、この当時外国語学校の生徒であり、兆民の主宰した仏学塾（この私塾では「和漢書」

「漢書」「道学書」の授業が課せられた）にも学んだ安藤謙介（一八五四―一九二四、兆民と同じく高知出身。後に長崎・新潟各県知事。横浜市長、京都市長、衆議院議員を歴任）の伝えるところであって「西洋では宗教を以て徳育の根本としているが、今日の日本で、かつ官立の外国語学校で、仏教を用ゆることも出来ねば、耶蘇教を教ふることも勿論出来ぬ、我国民の道徳を維持し、人格を高くするのに最も適当なのは孔孟の教である。然るに当時は、福沢派の即ち物質的教育が世間を風靡した折柄で、……先生は当局と激論の末潔く辞職して仕舞った」と述べていて、兆民の談話と符号している。

兆民の漢学重視は、実用主義、功利主義に対する教養主義、古典主義に根ざしたものであり、東京大学において後に実現されていったものであった。だがその東京大学も、文学部第二学科の「和漢文学科」（一八七九［明治十二］年設置。この課程は、日本の国家機構と支那法制を中心とした講義であって、後の国文学や漢学を教えるのではなかった。学生の数もきわめて少なかった。この当時、日本に古来からある伝統的な「古典学」は和文と漢文とを分割して学習してはいなかった）から「支那古典講習科」を加え、哲学、和文学、漢文学の三学科からなる文学部になり、和文学が国文学科、漢文が漢学科となって、博言学科や史学科等とともに講座制を導入して（一八九三［明治二十六］年）、哲・史・文の学風ができてくるのにはなお多くの時を要したのであった。

開成学校からの分離独立

さて、東京外国語学校の開成学校からの分離独立は早くの内に達成されている。このことを学則（当時の用語では「教則」）を見ることによって検証しょう。

一八七三（明治六）年四月「文部省正定　外国語学校教則」には「第一条　此学校ハ専ラ外国語学ニ達スルヲ以テ

目的トナシ二種ノ学校ト見做スヘシ。甲ハ通弁ノミヲ志スモノヲ教授シ乙ハ通弁ヲ志スモノ及専門諸科ニ入ラント欲スルモノヲ教授ス」とある。これは「通弁」を目指す専修課程と、開成学校において「専門諸科」を勉強するための進学者の予備課程との二つのコースがあると言っているのである。翌七四年六月制定の教則では、「第一條　此学校ハ外国語学ヲ志スモノヲ教授スルノミナラス又専門学校ニ入ラント欲スルモノヲ教授ス」のように同じ趣旨のことが簡潔な表現に改められている。

主として専門学校と外国語学校について規定した「学制二編追加」（一八七三年四月二十八日公布）に依拠して七四年四月改訂された外国語学校教則第五条には「下等語学（修業年限四か年の内、前半の二か年を当時は「下等」と言っていた）ノ教科ヲ卒リタル者ハ専門学校ニ入ルコトヲ得ベシ」とあり、次の第六条には「外国語学ヲ専修スルモノハ上下二等（四か年の修業をいう）ノ教科ヲ卒ルヲ法トス」とあって、専門学校へ進学する道も、外国語学専修課程に進む道も両方ともに開かれていた。専門学校とは開成学校を指している。専修している語学による区別はもとよりなく、英仏独語学の生徒が開成学校に入っていったのは、そこに外国人を雇用して英語で教授する課程があったからにほかならない。文部省年報には「明治七年九月二十二日独仏語学官費生十八名上等第六級へ昇進ニ付開成校へ転学セシム」とか「明治七年第二月試験ニヨリテ上級第六級ニ昇進スル者二十一名内開成学校ニ入ル者十九名」「同年（明治七年）第七月試験ニヨリテ上等第六級ニ昇進スル者二十一名内開成学校ニ入ル者十八名」のような記載が続いているのはこのためである。

だが、専門校への予備校的性格を払拭し、語学を専修する学校であるとの声明はこの後すぐに出されるのである。一八七五（明治八）年の『文部省第二年報』では、校長肥田昭作（校長在職期間は一八七五年五月から同年八月まで）は文部大輔田中不二麻呂宛に「先是本校ハ外国語学ノ名ヲ顔スルト雖魯語清語ヲ除クノ外其実ハ専門予備校ノ如

キ者ナリシガ英語学校分立以還既ニ本校生徒専門校ニ転進スル等ノ事情略絶タルニ似タリ是モ於テカ初テ語学校ノ名実共ニ行ハルベキ機ニ至レリ」と述べ、「夫本校ノ生徒タルヤ徒ニ尋常通訳ニ供スルニアラズシテ他日国家ノ需ニ応ジ大ニ有用ノ器トナルモノナレバナリ」と自負するかのごとき文言まで見える。校長は肥田のあと、渡部温（一八七五年七月から一八七七年一月まで在職）が務めた。

一八七六（明治九）年の校則にはもはや「転学」の字句はなく、関連記載事項もない。「一　本校ハ仏語学、独語学、魯語学、漢語学等ヲ教授スル所トス」のように、世間一般の受け取り方はいかようであれ、言語名の後に「学」を置き、簡潔な中に目的を明確にした文言は、言語それ自身を学問の対象とみなし、まさにこの時から自らの存在意義を見出したことを唱った宣言と受け取ってよい。後年の一八八三（明治十六）、八四年にも「第一條　本校ハ仏語学独語学露語学漢語学朝鮮語学科ヲ教授スル所トス」とあって、一八八〇（明治十三）年に増設された朝鮮語学科を加え、変更されることなく、この文言は踏襲されてゆくのである。英語は開成学校が行い、他の各国語は外国語学校に委ねられたとみるべきであろう。

だが、英語の教授が東京外国語学校からすべて消滅したわけではなかった。一八七七（明治十）年九月以降、唯一漢語学科上等の課程で兼修せられており、一八八四（明治十七）年九月からは朝鮮語学科でも第四年より英語学を兼修することとなったのである。これについては後述する。

開学当初の一八七三（明治六）年、修業年限を四年とし、学科は中級・上級課程（これを当時「上等」と呼んだ）の二年間（一年間前期後期を二年分、即ち当時の用語では「四級」に分けている）と入門・初級課程（これを「下等」と呼んだ。中級・上級課程と同じく「四級」に分かつ）の二年間に分けていたのである。学生数は英仏独魯清語の全学科計四五三名、試験未済八九名を合わせて五四二名。その内訳は英語学科二三六名、仏語学科七五名、独語学

科九六名、魯語学科一四名。清語学科については、開学の当初は中級・上級課程は生徒がおらず、入門・初級課程の四つのクラス（即ち「四級」を指す。第一級九人、第二級九人、第三級五人、第四級九人、計三二人）しか設けられていなかった。

翌一八七四（明治七）年二月には「上等」「下等」の名称はそのままで、上下二つの等を「三級」（三か年）に分けるよう変更した。各級は一年間（二学期）をかけて授業をすることになり、修業年限は上下併せて六年としたのである。同年三月の生徒数は、西欧語三種即ち英仏独以外の魯語学科では六二名、漢語学科は二九名。翌七五年三月には全校生徒四二三名中、魯語学科七九名、漢語学科二九名となっている。その後、漢語学科の生徒数は、一八七九（明治十二）年十月には五〇名、翌八〇年九月には四八名、八一年九月には四六名、八二年には六七名と次第に増加の一途を辿っている。一八七四（明治七）年六月から外国語学校魯語学科の数学と歴史担当の教師として一年半の間教鞭をとったメーチニコフは「英語科以外の学科についても、生徒の殺到ぶりはすさまじかった。この点ただひとつの例外は、……清語科で、そこだけは生徒数が五十名をこえることがまったくなかった」（渡辺雅司訳『回想の明治維新』岩波文庫、一九八七年）と記しているが、五年がたった一八七九（明治十二）、八〇年頃には魯語学科に追いつく勢いを示していた。

一八七六（明治九）年には、「下等」を修める期限を三年とし、「上等」を修める期限を二年として都合五年にして全科を卒業することとすると改めた。以後は五学年制をとっていくことになる。学年は九月一日に始まり七月十五日に畢る。学年を分けて二期とし、前期は九月一日より二月十四日まで、後期は二月十五日から七月十五日までという学年歴も以後大体このように踏襲されていった。

3　漢語学所の設立　―東京外国語学校漢語学科の母胎

外務省の漢語学所

この時期の高等教育の充実発展は文部省一省だけによって推進されたものではなく、幾つかの他の省も関わっていた。外国語学校は外務省の既成の語学養成機関を母胎として発足している。

日本の開国後、日清間の外交通商貿易が緊密になって、明治政府の対清外交の発展とともに、正式な国交が結ばれたことのなかった清国との間の条約の締結が急がれた。このため一八六九（明治二）年七月の官制改革によってできた外務省では中国語のできる人材の養成機関を開設する必要に迫られた。そこで外務省は自らの部局内で中国語通訳を養成しようとの考えに立って、翌七〇年五月三日太政官（弁官）宛に「支那語学塾に関する伺書」が提出された。この人材欠乏の窮状を述べた上申書を受けて、七〇年五月から同年末までに、申し出どおりの形で、漢語学所の教員が決定され任命された。翌七一年二月には漢語学所と洋語学所とが同時にそれぞれ開設される運びとなる。

開設にあたり教師の任命は以下のようである（『外務省報附録』所収「外務省官制沿革」明治四年辛未正月の項）。括弧内は日本姓である。

文書司
　　権上　　鄭　永寧
　　大佑　　葉　重寛（穎川）
　　権大佑　　葉　雅文（穎川）

少佑　蔡　祐良
少佑　源　通義（諸岡）
権少佑　周　道隆
大令史　張　武雅（清河）
大令史　劉　中平（彭城）
大令史　藤原蘭之（石崎、柳）

この九名の教員のうち、源通義を除く八名は漢語学所の教師であって、すべて長崎唐通事の出身であった。こうして鄭永寧（職務は督長）を責任者とし、穎川重寛（職務は督長兼教導）が教学の中心となる指導体制ができあがった。生徒の募集にも着手されて、文書は一八七〇（明治三）年十月二十四日附で同年内に諸官省に送られている（『外務省日誌』明治四年辛未第一号　自正月元日至十日所載）。

漢語稽古所出来次第近日開学ノ事
別紙　但旧年諸官省へ達ス
今般当省ニ於テ漢学通弁ノ稽古取開キ候ニ付年齢十一二歳ヨリ十五六歳マテニテ可也手跡モ出来且学庸論孟ノ素読出来候テ有志ノ者有之候ハヽ子弟厄介ノ差別ナク当人ヨリ直ニ当省へ願出候様御申達可被成候此段申達候也
庚午十月二十四日　外務省

集められた生徒はおよそ五、六〇名。唐通事の子弟が多く含まれ、江戸時代の唐話教育を継承しそのまま南京官話が教えられた。教科書は『漢語跬歩』をはじめ、『二才子』『開裏開』『訳家必備』など唐通事時代のものが使われた。

明治政府は一八七〇（明治三）年外務権大丞柳原前光を派遣して、日清修好条規締結の予備交渉を行い、翌年の一八七一（明治四）年九月十三日、伊達宗城を欽差全権大使として清国へ派遣して、天津において清国側の全権大臣李

鴻章との間に日清修好条規と通商章程を結んだのであった。

外務省の漢語学所は、洋語学所とともに一八七三（明治六）年五月外務省の手を離れて文部省に収管され、改称して外国語学所となった。この外国語学所が、東京外国語学校の設立にともないそのなかに組み入れられて、この漢語学所の教師と生徒とが漢語学科の母胎となるのである。

一八七三（明治六）年四月三十日に日清修好条規が批准され、日本と清国との正式な国交が開かれた。日本の初代清国公使は山田顕義（清国に赴任することはなかった）であった。（事実上の初代公使となる）二代目の公使、柳原前光が、翌七四年五月清国へ赴任することとなり、公使館の要員として北京官話のできる通訳が必要となった。開学の当時、文部省所管の東京外国語学校では南京官話が教授されていて、北京官話を学んだものはまだいなかった。東京外国語学校生徒による北京官話習得のための外務省留学生の派遣の実現は、二年後の一八七六（明治九）年三月になるのである。

4　長崎唐通事の系譜

鄭成功の後裔

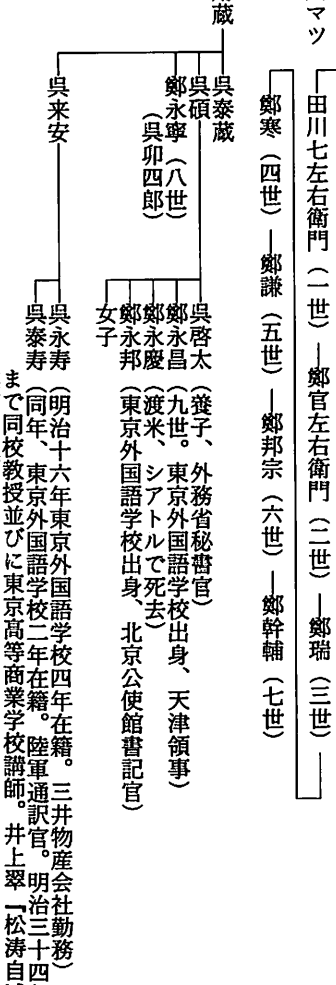
外務省の漢語学所から移管され、漢語学科の核となって東京外国語学校の開学から廃校の後までも続いた唐通事の血脈と南京官話についてここで述べておきたい。

長崎に最初に唐通事が設けられたのは一六〇三（慶長八）年である。はじめは単に唐通事といっていたものが、その後、業務が多岐多様にわたり、年齢や経験、能力によって多くの位階を設けて職務にあたらせた。東京外国語学校

漢語学科の開学にあたって長崎から招請されたのはいずれも代々大通事を出した唐通事の名門である。

鄭永寧は鄭幹輔の養子である。鄭の家は、鄭芝龍と日本人田川氏の娘マツとの間で、肥前平戸に生まれた明朝の遺臣鄭成功の後裔である。滅亡に瀕した明朝に忠節を誓い、清に乾坤一擲の戦いを挑む鄭成功の波瀾万丈の生涯の物語は、現在もたびたび上演される近松門左衛門の歌舞伎浄瑠璃「国姓爺合戦」の英傑和藤内の活躍としてポピュラーとなっている。

鄭永寧は、次の略系図に示すように、在日八世にあたる。その実家は呉家（呉氏の祖は福建省泉州府晋江県）であって、日本に帰化し、長崎に住んで世世通事となり、その八世を呉用蔵といった。鄭永寧は一八二九（文政十二）年生まれ。呉家を出て鄭幹輔に養われ、鄭姓となった。



鄭永寧の養父の鄭幹輔（号、敏斉。一八一一〔文化八〕年生。一八六〇〔万延元〕年病没）は、和漢の学に通じ、長崎において「鄭先生」として名高く、世世幕府の訳司であった。江戸所昌平校に出向四年間授業をした。鄭幹輔は、唐通事の満洲語研究さらに英語研究で斯界を指導し、崇福寺竜宮門の建設の発願主となった。明治中興の忙しいとき、唐通事出身者が多数輩出して朝野の間に大いに活躍したのは鄭幹輔先生のお陰であると死後二〇年後に崇福寺第一峰門前に建てられた敏斉鄭先生遺徳碑に説かれている。撰文したのは頴川重寛で、書は呉来安である。

鄭永寧はこの鄭家の家禄を襲封して唐通事となった。鄭永寧は、維新後、一八六九（明治二）年には東京に召されて外国官一等訳官となり、外務省に入り、権大書記官となった。七一年伊達宗城が清国に赴き日清修好条規を調印したとき随行し、功績があった。その後、外務省にいて一八八八（明治二十一）年六十歳で退職。六十九歳で東京で逝去。『訳司統譜』（頴川君平編著、一八九七年九月刊）の跋文を書いて、不朽の名を残している。ロシアの使節レザノフが一八〇五（文化二）年に露文の書とともに日本文と満洲文の国書をもたらしたのが研究の機運を高め、『御製増訂清文鑑』（一七四一〔清暦乾隆三十六〕年）の舶載に及び、鄭永寧は彭城昌宜、同広林と協力して満洲語を研究し『清文鑑和解』（一八五五〔安政二〕年）を完成させた。風貌については「白い長髯が二尺余もあり、まことに御立派な風采で矢張り日本服のみ着ていられました」（岩村成允「外交と支那語」中国文学研究会『中国文学』第八三号一九四二年五月）とある。

本稿によって明らかにされたように、鄭成功の後裔が外務省漢語学所や旧東京外国語学校の教師や生徒になっていたことは意外な事実である。

鄭成功の弟七左右衛門の後裔で一二代目にあたる福住信邦（横浜市緑区在住。一九五五〔昭和三十〕年に改名。故鄭審一〔元法政大学教授〕の二男）は、鄭芝龍の血を継ぐ一家として一族の内部や「訳司九家」の仲間たちの間では

語り伝えられてきたことをようやく明らかにして（『神奈川新聞』一九八五年十月二十四日）、近著『新国姓爺合戦物語り』（講談社出版サービスセンター、一九九二年）の「あとがき」にもつぎのように述べている。

七左右衛門は鄭氏政権滅亡後に国際摩擦を避けるため日中貿易の表面から身をひき、官左右衛門と改名し、西国諸大名からの招きも辞退していた。幕府では半世紀以上にわたる功績を配慮して彼の死の直前に長崎唐通詞の要職を贈り、子孫の安泰を保証した。長子茂左右衛門は父代から鄭氏に復姓することとし、墓碑に「宗明公府君」の贈り名を刻す。

七世の永寧は北京代理大使となり、明治四年の日清条約、七年の台湾事件日清談判などに活躍し、三〇年に『訳司統譜』の跋を記した頃には、三人の子達が外務省に勤務して本省・大陸の大使館などで活躍し、三男の永邦は清国朝廷で西太后の信頼が篤く国内でも伊藤博文の懐刀として重用され二八年の日清「下関条約」締結に際しても通訳・知恵袋として才能を発揮していた。当時は外務省の最重要対象国は清国であり、我が子たちの活躍舞台である清国との渉外活動の支障になることを恐れた永寧は子孫が唐通詞の職を受けるにあたって創作した一族の出身地は福州であると登録した故事を採用し、台湾鄭氏の直系子孫ではないことを殊更に「跋」の文中に記載することにしたり（これは彼の思い過ごしで、清国政府内では昔の国姓爺の名は風化して配慮する必要はなかったと言う）して表面をつくろった。

外国語学校教諭　穎川重寛

穎川重寛は葉姓の穎川家八代の保三郎であり、一八三一（天保二）年生まれ。通事の家柄。一八六二（文久二）年訳家学校（唐通事学校）の教授方の一人。一八五七（安政四）年江戸学問所勤め。一八七〇（明治三）年には外務省三等書記官。遣清大使に従い通訳の任にあたった。その後、文部省の外国語学校教諭、高等商業学校の教授に補せられた。病を得て、一八八八（明治二十一）年長崎に帰り、一八九一（明治二十四）年死去。享年六十一歳。

「穎川重寛先生之碑」は、鄭幹輔の碑の傍らに建てられ、その前にはポルトガル原産のホルトの樹が茂っている。穎川夫妻の墓は、崇福寺後山最上部の巨大な円弧形の石壁に囲まれた穎川家墓地にあって、そこからは長崎湾が一望

に見渡せる。墓碑の正面には本姓（唐姓）の「葉」の字が刻まれている。今は詣でる人もほとんどいないのか墓地は竹藪に埋もれている。碑の建設の経緯について述べた記事と碑文を次に掲げる。

故穎川重寛先生記念碑建設ノ事タル旧門生等多年ノ宿望ニシテ一時稍其ノ緒ニ就カントセンコトアリシカ偶内外ノ事情ニ礙ケラレ遂ニ中止ノ已ムヲ得サルニ至レリ爾来幾星霜ヲ経テ明治三十六年恰モ先師ノ十三回忌ニ際シ当時台湾総督府在勤谷信近君功ニ建碑ノ議ヲ首唱シ画策ヲ立テ地ヲ先生墳墓ノ地ナル崎陽ニトセラルヲ以テ建碑一切ノ事務執行ヲ在長崎旧門生ニ謀ラル於是生等微力ヲ顧ミス奮起シテ其任ニ当リ同年六月檄シテ旧門下及縁故アル諸士ノ賛同ヲ乞フ然ルニ諸士ノ先生ヲ懐フノ厚キ立ロニ捐資数百金ニ及ヒ益予期ノ工事ヲ進捗スルノ意ヲ固フセリ依テ一面ハ碑文ノ起案揮毫等ニ関シ東西数回ノ往復交渉ヲ累ネ一面ハ建碑ノ設計ヲ定メ石材ヲ肥前国北松浦郡鷹島黒島ノ邑ニ需メシメテ其ノ間或ハ此地ヲ通過セラレシ旧門下諸氏ト会シ彼岸我意思ノ疎通ヲ図リ同年十二月初メテ彫刻ニ着手シ越エテ明治三十七年五月建設ノ許可ヲ得同月刻成リ碑面摺本ヲ賛成諸君ニ配送シ同年六月碑文及瑞籬一切ノ工事竣成シタルヲ以テ同十七日先生ノ近縁故旧ノ士ヲ請シ極メテ崇厳ナル法要ヲ執行シ併セテ建碑落成ノ式ヲ挙ケタリ之ヨリ先キ未亡人加古氏特ニ東都ヨリ来崎セラレ当日臨席ノ栄ヲ得タルハ深ク感謝スル所ナリ茲ニ梗概ヲ叙シ写真碑文捐資芳名録及結算書等ヲ添ヘ謹テ報告ス

明治三十七年十二月

若杉米太郎　加藤正生　神代延祥
広渡桂太郎　鈴木行雄

穎川重寛

穎川重寛先生之碑

先生諱重寛号蓮舫本姓葉穎川某氏通称保三郎家世

穎川重寛先生之碑

訳司天保二年辛卯十月二十日生於長崎幼而穎悟長益嗜学従鄭敏斎先生習清語修時文博洽強記為儕輩所推重安政四年先生年二十七擢江府学問所訳詞明治中興内外多故多畳膺要職三年入外務省屢随遣清大使司筆舌應對以禮周旋中節多所賛襄帰朝晋外務三等書記官叙正七位後入文部省補外國語學校教諭又轉高等商業学校教授先生在教職前後二十有四年循循善誘誨人不倦其間人材輩出得為世用者指不勝屈十五年叙従六位賜勲六等旭日章二十二年辛卯四月二十一日没於家享年六十有一葬於祖塋之次考重明妣穎川氏配加古氏二男三女長夭次子甲子郎善継家業官台湾総督府法院通訳叙従七位尋以疾卒桑原英馬入贅三女先生没後十四年同人等追慕栽培之徳因叙先生之生平立石於崇福寺前以垂不朽

明治三十七年二月

門人　従四位勲四等　中田　敬義謹題
門人　正七位勲六等　草場謹三郎謹撰文
門人　従六位　北條　直方謹書

門生共建

伊東小三郎　石原逸太郎　池田忠吉　池田　載　盧　高朗
速見一孔　北條直方　豊嶋捨松　徳丸作蔵　小田切万寿之助
御幡雅文　大河平隆則　小原金三郎　大貫次郎　大澤　茂
小川忠彌　若杉米太郎　川島浪速　加藤義三　加藤正生

金田千代吉　吉田椿四郎　横田三郎　吉野利喜馬
田辺熊三郎　谷　信近　谷　信敬　辻鐔太郎　吉田清揚
長川新吾　草場謹三郎　黒柳重昌　神代延祥　中田敬義
山本瀧四郎　松永由熊　二口美久　呉大五郎　草鹿又次郎
呉　永寿　呉　泰寿　穎川君平　榎本師美　小林光太郎
鄭　永邦　里見義正　榊原源太郎　木野村政徳　鄭　永昌
白須　直　重野紹一郎　平野寛一郎　広渡桂太郎　島田祭太郎
瀬川浅之進　関口長之　鈴木行雄　末吉安馬　平岩道知
彭城邦貞　森本貞徳　山田万里四郎

5　唐通事の教えた「南京官話」

南京官話の性格

鄭永寧は興亜会の会同（一八八〇［明治十三］年五月八日学習院にて開催）における演説で次のように述べている。

……官話ハ明末清初ニ在テ南方ニ止マリタルモノノ如シ。南人北話ヲ為スヲ屑トセス、北人モ之ヲ如何スル無シ。何トナレハ元人燕ニ都セシヨリ宋ノ遺臣ハ浙杭ヲ忘ルル能ハス。明ノ成祖、燕ニ都セシヨリ太祖ノ遺臣ハ江蘇ヲ去ルニ忍ヒス況ヤ満清革鼎ノ後ニ於テヲヤ。……我国ノ人彼ノ官話ヲ学ヒント欲セハ此教師ハ之ヲ江蘇地方ニ求ムルヲ佳トス。

（『興亜会報告』第四集、一八八〇年五月十四日）

「官話」とは、官場（官界）の言語、即ち公用語という意味であり、政府官員が中国全土で施政を行うのに用いた

言語である。明治初期にあっては、日本では「官話」は後の時代のように、「北京官話」を指すといった共通認識をもつには至っていなかったのである。鄭永寧の説く官話の実体は、明代のはじめ南京に首都の置かれた（一三六八年）頃の江蘇地域を背景に南京語を基礎として成り立った中国全土に通用する標準語の地位をもった言語、すなわち「南京官話」を言っているのである。鄭は誇りある大明国の遺臣であり、その母語の南京官話を推奨してやまぬのは、まさにこの強い遺臣たるの自意識に根ざしているのである。

南京官話は、明帝国の首都が南京から北京に遷都（一四二一年）して後も、約二二〇年近く発展し継続する中で明代官話となり、国家語の地位を得た。この明代官話は、時代的には中原地区の元代官話を継承したものであり、つぎに清代官話を形成していったものである。南京官話の音韻特徴としては、入声（声門閉鎖音）を含む五種の声調をもっていること、（呉語の共通特徴とする、したがってそのグループに入る現代の南京語がもっているような）有声音頭子音は消失して無声子音になっていること、平声のみが（北京語のように）二種に分裂しているといった現代の北方官話に近い言語であった。

中国人の海商にとっては、東・南シナ海の海域はわが庭も同然であって、平戸、長崎、呂宋（ルソン）、東京（トンキン）などではこの「南京官話」が共通語となっていた。官話は、江浙地区はもちろん福建沿岸の諸都市（福州・漳州・アモイ等）にも通用していた。閩語地区では、語彙や語法は地方語を換えてできるだけ官話を使用してはいるが、その発音は自分の閩語のなまりを相当程度混入させながら話していた。このような地方的変種までもがひっくるめてその当時「官話」と称されていたのである。この海域の中国人は「官話」と郷里の地方語を話す二重言語の使用者であったと考えられる。たとえば同郷の福州人の間であれば、官話でなく、遠慮なく福州語でやりとりしたことであろう。通商貿易に必要とする夥しい文書は官話で書かれた。官話は権威をもった書面語であったからである。

長崎に入港する唐船の起帆地は、中国南部の諸都市ばかりではなく、現在のベトナム北部、タイ、マレー半島やジャワ島等広範囲に及んでいる。船主や荷主、乗員も中国南部出身の中国人であって、この通商の業務で官話が用いられたのである。長崎唐通事の唐話には漳州口、福州口、南京口の三方言があった。『訳司統譜』の跋文を書いた鄭永寧も「乃余ガ過継セル家ノ先祖ハ鄭宗明、福州府長楽県、実家の先祖は呉栄宗、泉州府晋江県、一般ノ士族ニシテ福建人ナルコトヲ知ヌレド」と自分の出自について記していて、母語とした言語の系統が福州語であることが推察されるのである。

鎖国時代、長崎が唯一の海外との貿易口であったわけではなく、他に薩摩の島津氏を介した琉球口と対馬の宗氏を介した対馬口それに松前口の合わせて四つの貿易口があった。幕府は琉球口貿易を長崎貿易の補助貿易口として公認し、薩摩藩はこれを藩財政の重要な柱と位置づけていた。薩摩藩は琉球口貿易を拡大し、幕府から許された範囲を逸脱した「密貿易」を行うまでになっていた。薩摩藩には唐通事、朝鮮通事という諸藩に類例のない通事制度が設けられ、語学が盛んに勉強されたのはこの「藩営密貿易」に対応するためであった。

中国と琉球の間の使節、冊封使や進貢使の用いたのは「(北京) 官話」であるのに対し、薩摩藩が城下や長崎留学で学ばせたのは「(南京) 官話」であった。唐話に堪能であったと伝えられる薩摩第二十六代藩主島津重豪が僧曾槃(長崎の本草学者) と石塚崔高 (唐通事鮫島正次郎の門下生) に編集させた『南山俗語考』(「南山」は島津重豪の号。付録とも六巻。一八一三 [文化九] 年板行) なる唐話辞書には「官話」という語こそないが、音韻も語彙体系もまぎれもない江蘇南京の言葉が反映されている。そのことを長崎唐通事は熟知していたからこそ、明治になり外務省の要請で『南山俗語考』を底本に官話教本『漢語跬歩』(後述) を編集した (正確には「換題本」に近い) のであった。

明清時代、琉球でも中国の冊封と正朔を受けて進貢貿易を行い、久米村に住んだ「門人三十六姓」の子孫も朝貢を

南山俗語考序

薩國跨有日隅濱海之地西南面大海里漢船飄到封内殆無虛歲是還戍候渡海而候察之其有勘合係意外者詳傳伯屬之補損漏濟匱乏備飢衣凍藥而飛報長崎鎮臺通知送汛護送之時港其雖何極論皆待譯者譯言一差或恙事端故影加

南山俗語考卷一

天部

天文時令類

天地 アメツチ　乾坤 ケンコン　天河 アマノガハ

天陰 クモル　起霧 キリノタル　起霞 カスミノカル

靉靆 クモノタナビク　日頭 ヒノツチ　日蝕 ヒヲヒレコク

日高 ヒダカイ　日落 ヒノヰガル　東照 トウセウ

「南山俗語考」

漢語跬步總目

第一卷

天部

天文時令類

地部

地理類

人部

漢語跬步第一卷

天部

天文時令類

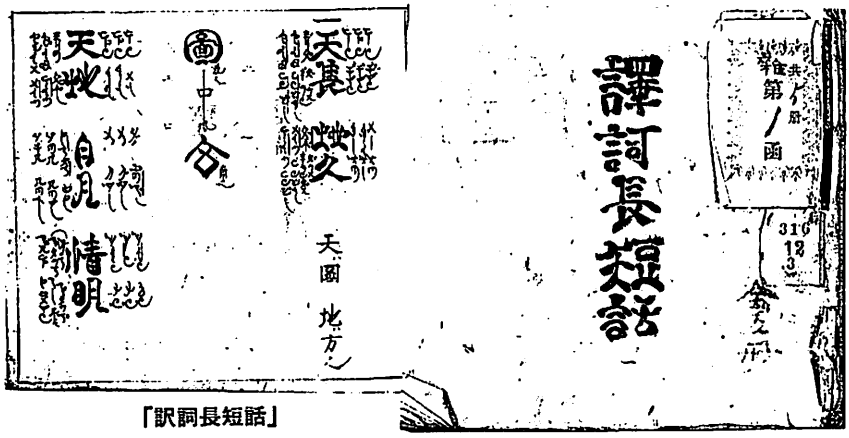
天地　乾坤

天河　天陰

起霧　起霞

雲頭　靉靆

「漢語跬步」



「訳詞長短話」

支え、多くの留学生を福州経由南京や北京に送り、中国語の勉強が熱心に行われてきた。残存する清代の中国語の教本にはすべて「官話」という語がつけられているのだが、この「官話」は北方官話を基礎に福州語と南京語の要素が混入した清代官話であることが明らかにされている。

唐通事の中国語教育

唐通事の子弟への中国語教育は幼いときからはじめるのがよく、七、八歳になってからはもうすでに遅いとされていた。唐通事の中国語学習の順序はおよそ次のようであったという。

最初発音を学ぶために『三字経』『大学』『論語』『孟子』『詩経』などを唐音で読む、ついで「恭喜」、「多謝」、「請坐」などの二字話を習い、「好得緊」、「不暁得」、「吃茶去」等の三字話を諳じ、さらに四字以上の長短話を学ぶ。その教科書が『訳詞長短話』である。それから『訳家必備』『養児子』『三折肱』『医家摘要』『二才子』『瓊浦佳話』など唐通事編集の写本を卒業すると、『今古奇観』『三国志』『水滸伝』『西廂記』等を師に就いて学び、さらに進んで『福恵全書』『資治新書』『紅楼夢』『金瓶梅』などを自習し、難解なところを師に質す――以上が普通の順序であった。これらのうち唐通事の中国語学習に最も重宝がられた教科書は、東京通事魏五左衛門の編纂にな

る『訳詞長短話』（一七七五年［寛政七］年、長崎県立図書館蔵）と貿易交渉の場での実際のやりとりを想定した会話で記された『訳家必備』とであって、この二冊を卒業することが何よりも肝心とされていた。

『訳詞長短話』と同じく魏氏仮名文字によって表記されている同種の語学書『東京異詞相雑解』（長崎大学経済学部分館武藤文庫蔵。同大学の若木太一教授より平成八年度科学研究費成果報告書として筆者に恵与さる）は、交趾（現在のベトナム）との交易に必要とされる東京通事の語学書でありながら、そこに記された南京官話と称する中国語の実体は福州語であって（そのことは、そこに盛られている多量の福州語彙とこの方言に特有の子音同化現象が見られることからわかるのだが）、魏氏は、実は福州語を母語とした通事に相違ない。

6　東京外国語学校漢語学科の開業

漢語学科の教学

開学は一八七三（明治六）年十一月四日のことである。この当時の中国語は、文部省年報には「清語」とも「漢語」とも記されている。開学当初の『外国語学校教則』（一八七三、七四年）では「支那語」なる名称もみられるが、その後『東京外国語学校一覧』（一八七四年）、『東京外国語学校校則』（一八七六年）ではもはや「漢語」とあって、以後は「漢語」に統一され、一八八五（明治十八）年までは一貫して「漢語」と称された。開学したばかりの外国語学校に入学した中田敬義（後述）も「そのころは支那語を漢語と呼んでいた」（『明治初期の支那語』前掲『中国文学』）と回想しており、一般には「漢語」と呼ばれていたことが知られる。

付言すれば、一八八五年に廃校の後、高等商業学校附属外国語学校として再興されたときには、その一覧（一八九

七［明治三十］、九八、九九年）には「清語」という名称がみえる。正式に「支那語」となったのは一九一三（大正二）年九月のことで、『東京外国語学校一覧　従大正三年至大正四年』に「支那語学科（旧称清語学科　大正二年九月改称）」とある。清国は一九一一年の辛亥革命によって滅び、一九一二年中華民国が成立し、これがために改称されたのである。韓語学科が朝鮮語学科に改称されたのは一九一一（明治四十四）年一月のことで、これは一九一〇年の韓国併合の後のことである。

開学の一時期、日本人教師は漢語学所時代の教師が教学にあたったが、その内数名が退職し、一八七四（明治七）年三月では日本人教師は四名（川崎近義が新たに就任。川崎を除く他の穎川、蔡、石崎は唐通事の出身）、外国教諭一名となった。

穎川重寛（漢語学一等教諭）この時四十三歳。
蔡　祐良（同四等教諭）
石崎粥之（同教諭心得）
川崎近義（同教諭心得）　この時三十歳。一八八四（明治十七）年病没。
葉　松石（漢語学外国教諭）　魯語学科教師メーチニコフが「外交ルートで中国から雇い入れた特別高官――彼は孔雀の羽飾りのついた帽子をけっして脱ごうとしなかった」と描写している人物。上海総領事館に人選を頼み招請された。浙江省嘉興の人。一八七四（明治七）年から七六年の間在任。

生徒（三〇名）
上等第六級　中田敬義（石川）　石原昌雄（東京）　穎川高清（長崎）
下等第一級　富田政福（東京）　穎川雅言（長崎）　穎川雅文（長崎）　彭城邦貞（長崎）　鄭永昌（東京）
吉島俊明（長崎）　榎本師美（東京）

鄭永昌

下等第二級甲　二口美久（石川）　加藤義三（東京）　遠山忠治（東京）　中山繁松（長崎）

下等第二級乙　池田忠吉（東京）　周壮十郎（長崎）　神代愛二郎（長崎）　山岡惟光（東京）

下等第三級　御幡雅太郎（長崎）　柴田銚二郎（東京）　関口長之（東京）　石崎正之（長崎）　鄭邦二郎（東京）　小林光太郎（東京）　盛久二郎（長崎）

下等第四級　古川鉄太郎（東京）　中山信吾（東京）　大澤茂（東京）　渡邊寛治（東京）　高島敬久（東京）

長崎唐通事の血筋をひく者（鄭永昌［この時二十歳］や鄭邦二郎［鄭永邦。この時十二歳］の如く東京に移籍している者もある）が多いことは一見してわかる。かれらは入学当初から相当の語学力をもっていたことであろう。

その他の生徒たちは漢語学科の選択においていかなる背景と動機をもっていたのだろうか。外務省の漢語学所及びそれを母胎として成り立った東京外国語学校の生徒（当時十六歳）であった中田敬義（一八五八［安政五］年生まれ。元外務省政務局長）は

わたくしの子供のころは、東京や長崎には蘭学がおこなはれていたけれども、わたくしの金沢あたりでは、漢学よりほかはなかった。それでわたくしも六つのころから『大学』などを習っていた。明治のはじめ廃藩置県がおこなはれていたのであるが、そのときわたくしたちの先輩に加藤恒という人がいて、学務係をやっていたが、まことに卓見のもちぬしでこれからはどうしても支那語をやるものを作らねばならんといって、金沢で漢学をやっているもののうちから特に十七、八人いた

有望な者のうちから三人だけ選んで漢語―そのころは支那語を漢語とよんでいた―の勉強に東京に出すことになった。この三人を選ぶために対策、すなわち選抜試験がおこなわれた。その題は「豊太閤征韓可否如何」というのであった。この答案を漢文でしたためて、三人合格し、わたくしもその一人になった。

（「明治初期の支那語」前掲『中国文学』）

と述べている。

当時の漢語学科の科目と一週の時間数は次のとおりである（『東京外国語学校官員並生徒一覧　明治七年三月』による。前掲の生徒三〇名は級毎に左記の時間割のいずれかを受けていた）。授業開始時間は、魯語が八時半のほか、英仏独漢はすべて八時の始まりである。

漢語学上等第六級（下等第一級、下等第二級甲、下等第二級乙も同じ）

	月	火	水	木	金	土
自八時	諳誦					
至九時	諳写	同	同	同	同	同
自九時						
至十時	生課	同	同	同	同	同
自十時						
至十一時	算術	同	同	同	同	同
自十一時						
至十二時	話稿	同	同	同	同	同
自一時半						
至二時半	解文	作文	解文	作文	解文	作文
体操	同	同	同	同	同	同

漢語学下等第三級（下等第四級も同じ）

	月	火	水	木	金	土
自八時 至九時	習字	同	同	同	同	同
自九時 至十時	話稿	同	同	同	同	同
自十時 至十一時	諳誦 諳写	同	同	同	同	同
自十一時 至十二時	生課	同	同	同	同	同
自一時半 至二時半	算術	同	同	同	同	同
	体操	同	同	同	同	同

この当時の教学課程や様子については、中田敬義は「ここ（東京外国語学校のこと。執筆者注、以下同じ）に入ってからは以前（漢語学所のこと）とちがひ、『今古奇観』をすこしづつ支那語で教はり、また作文は日本の官庁の布達とか告示とかを支那の吏牘文に訳したり、また上海の申報などの記事の散文を日本文に翻訳するといふやうなことをした。これはみんな潁川氏（潁川重寛を指す）の担当であったから、長崎風の発音（南京官話のこと）で教へられた」（前掲書）と回想している。

7　北京官話教育への転換　―川崎近義の事績

北京官話教育の開始

東京外国語学校に先立ち、京都の東本願寺の育英教校では一八七五（明治八）年十二月から南京官話とともに北京官話が教えはじめられてはいたが、日本国内で公教育における北京官話教育の実施は東京外国語学校が最初である。

東京外国語学校では、一八七六（明治九）年九月から南京官話教育を続行すると同時に、北京官話教育へと転換を図りはじめた。漢語学科では、従来までのものを「南語」とし、主には「北語」すなわち「北京官話」を教授することになるのである。北京から中国人教師の招請もはじまり、同年九月一日、北京人の教師薛乃良が東京外国語学校に招聘されて着任し、日本人教師の川崎近義との共同研究によって北京官話教育が開始されたのである。北京官話の学習には、その当時欧米で漢語を学ぶ者に広く用いられ、初級教科書として評判になっていたトーマス・F・ウェードの『語言自邇集』（Kelly & Walsh L. T. D. 一八六七年）が使用された。本書は元来英国公使館での教育用に編まれたものであった。

東京外国語学校漢語科が北京官話の教育へと転換しはじめた当時のありさまは、何盛三が「明治九年春、北京人（旗人）薛乃良が前教師葉松石に代わって来たり教師となるや、其四月新たに応募した二〇余名の学生よりはじめて北京官話の教授を開始し、従来の南京語の学生も大半北京語に移った。残りたる少数者の為に南京語は北京語科に並立して居たが……」（『北京官話文法』太平洋書房、一九二八年十月、七一―七二ページ）と伝えている。北語と南語の並立は『東京外国語学校一覧　明治十六、十七年』にまで見られることから、続行されたもようがうかがえる。北

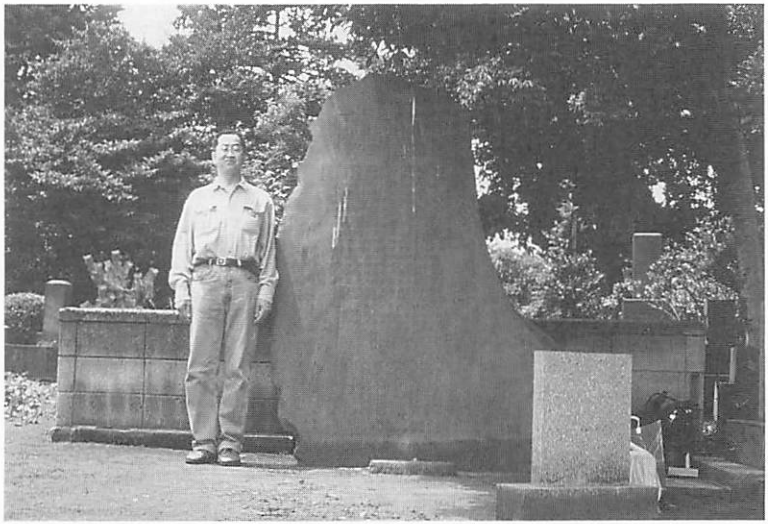
川崎近義（右から２人目）

京人教師の招請は、薛乃良に続き、龔恩禄（明治十一年九月から明治十三年九月まで）、祭伯昴（明治十三年九月から明治十四年十月まで）、関桂林（明治十五年五月着任）と続いた。

この転換にあたって、いかなる教授法がとられたか。何盛三は「当時の教授法を見るに、外国語学校にてわ薛（ママ）乃良の招請と共に学校に蔵したる纔か一部の語言自邇集を原本とし、生徒をして悉く之を筆写せしめて教科書とし、先ず其平仄編に依り正確なる発音を練習し、十分習熟して甫めて談論編に移り、更に上達して後、教授潁川重寛が紅楼夢を講じ、川崎近義が熱心に之を補佐したと云ふ」（前掲書、七三ページ）と記している。

この写本がどんなものであるかは、現在、『語言自邇集　散語問答　明治十年三月川崎近義氏鈔本』が東洋文庫に蔵せられていて、中国人教師を相手に正確な音声の掌握に努力を傾けた跡がはっきりと見て取れる。特に四声と変調（トーン・サンディ）、重念（ストレス・アクセント）の重視とその記述のための符号の考案に、北京

『語言自邇集　散語問答明治十年三月川崎近義氏抄本』



川崎近義の碑

官話教育を担い先駆者となった川崎近義の苦心の跡を見ることができる。

北京口語を対象に近代的な意味においてはじめて記述的研究を行った川崎近義は一八四四（天保十四）年に生まれ、一八八四（明治十七）年病没、享年四十歳。水戸藩出身の川崎近義は、徳川慶喜と同じく、東京谷中の都共同墓地乙一号八側一八番の墓に眠っている。「川崎君墓誌銘」の石碑が墓からやや離れた乙八号八側六番にある。川崎近義の碑の建立は一八八五（明治十八）年のことで、それはまさに旧東京外国語学校の終焉と時を同じくした。

川崎君墓誌銘

君姓川崎名近義號西涯幼名銕之助舊水戸藩茨城郡堀村人父曰常衛門業農娶於同族生三子君其次也明治初政丕變舊習君憤然思有展其志乃以三年之秋偕友至東京是年冬因鄉人某之紹介遂執贄於長崎顕川君之門而學漢語焉明年春長野県召為吏甫及月餘辞職而帰顕川君嘉君謹慎深資倚任三月遂擢為外務省漢語學塾佐四月轉文書司等外二等七月遷一等仍兼漢語學塾頭六年五月調文部省等外一等歴十四等十五等出仕七年十一月罷出仕以奉職三年蒙賜如例是月即改為東京外国語学校学習教諭八年七月遷教諭補十年八月転助訓導十四年七月遷助教諭君夙夜匪懈克勤厥職十七年春嬰疾猶復趨公如故二月病増劇始入医院予毎省君疾時以曠廃職業為念竟以其年六月二十三日卒於淡路町之私寓距生於天保十四年春秋四十有二越三日葬於谷中天王寺之新娶会津某氏生子女各一女殤子近雄嗣其家君幼學為詩長学擊剣有慷慨之意惜皆未竟志以歿可悲也夫既葬之明年漢語諸生立石以表君墓乞予銘銘曰君性質樸言和貌恭與人無忤黽勉從公夙志未展吁嗟可惜佑啓後人奠此幽宅

清北平　張滋昉　撰並篆額

吉川安蔣　雕

明治十八年六月二十三日立石

谷　信近　磯部榮太郎　伊東小三郎　呉　大三　瀬川浅之進
横田三郎　鈴木行雄　伊達寧祐　鄭　永邦　滝野種孝
里見義正　嶋田粂三郎　加藤義三　中山繁松　吉嶋俊明

大河平隆則　田辺熊三郎　豊嶋捨松　頴川雅言　遠山忠治
二口美久　沼田正宣　石崎正之　関口長之　大澤　茂
柴田　晃　御幡雅文　小林光太郎　谷信敬　平岩道知
木野村政徳　小川忠彌　榊原源太郎　草場謹三郎　末吉保馬
呉　永寿　足立忠八郎　馬場　廉　平岡道生　榎本師美
頴川甲子郎　黒柳重昌　金森一孔　山田万里四郎　村田　亀
北條直方　加藤正生　竹内椿四郎　石原逸太郎　小田切万寿之助
草廉又次郎　重野紹一郎　大貫次郎　川嶋浪速　宮嶋大八
七里　恭　山本瀧四郎　池田　載　野間芳太郎　中川勝太郎
安原正意　望月幸三郎　大沢欽一　原　全平　原　次郎
呉泰寿　金田千代吉　田中金次　吉田清楊　石崎雄二
鉅鹿貫一　松永由熊　司馬　忞　三輪高三郎　辻鐔太郎
野間光彦　共建

8　北京官話習得のための留学生の派遣

漢語学科学生の北京留学

一八七四（明治七）年二月、外務省は特命全権公使柳原前光を北京駐在として派遣する際、北京官話習得のための留学生を同行させる案を太政官宛提出したことがあった（内閣記録局『法規分類大全』第十巻「官職門」（一）五八一―五八二ページ）。この時文部省は留学生派遣の実現化はできなかったが、翌七五年、外務省が駐北京公使館附三

等書記見習の増員要求を提出し、七六年には東京外国語学校漢語学科の在学生三名が選抜されて外務省書記見習として北京に送られ、北京官話を学ぶこととなった。中田敬義、穎川高清、富田政福（病気帰還）の三名がそれである。留学生たちは三、四年北京官話を学んで帰国した。中田敬義は一八八一（明治十四）年三月に帰国している。

中田敬義によるイソップ物語の翻訳『北京官話　伊蘇普喩言』（一八七九年）は、この北京留学のあいだに、二年半の月日を費やし、龔恩禄の協力により完成した。これは北京に留学するにあたって、当時の東京外国語学校校長の渡部温が英語から翻訳した自分の『通俗伊蘇普物語』を北京官話に翻訳するように嘱したことによる。日本には北京官話のテキストがなく、将来、東京外国語学校でテキストにしたいという考えがあったからである。『北京官話　伊蘇普喩言』の序を書いた英紹古は北京での中田敬義の先生であって、翻訳を手伝った龔恩禄は英紹古の次男。満州旗人。「龔」という漢姓は官憲の眼を欺くためであったという。龔恩禄は一八七八（明治十一）年東京外国語学校の外国人教師として来日した。

こうして一八七九（明治十二）年九月の漢語学科教員の陣容は以下のようになった。

訓導　龔　恩禄（清国）
　　穎川重寛（長崎）
助訓　川崎近義（東京）
教員　神代延長（長崎）（明治十三年辞職、その後郷里に帰り長崎県中学校と長崎外国語学校で清語と英語を教えた。「熊」姓の唐通事の家系）

陸軍の参謀組織が計画的、組織的に中国へ将校を派遣しはじめたのは一八七三（明治六）年からである。その後、一八七八（明治十一）年には参謀本部が設立されて活動は強化されていったが、対中国政策の一環として、翌七九年

一月参謀本部管西局長の桂太郎が参謀本部長山県有朋に軍に必要とする通訳を得るための策を上申した結果、清国留学生が実現化した。

一八七九年十一月、陸軍参謀本部は東京外国語学校漢語学科の生徒計五〇名より一二名を採用し、その他から四名を選び、計一六名を陸軍清国語学生として北京官話を学習するため同国留学を命じた。これら一二名の留学生とは、即ち

上等第三級生　柴田晃、御幡雅文（長崎）、関口長之（東京）
上等第四級生　大澤茂
下等第二級生　谷信敬（旧壬生藩士谷釜作の五男。兄の谷信近とともに東京外国語学校に学ぶ）、瀬戸晋、平岩道知
下等第三級生　原田（木野村）政徳（小田原出身、父は藩士木野村政成）、沼田正宣、小川忠彌
下級第四級生　西山（草場）欽三郎（肥前出身。鍋島藩の大儒草場佩川の孫にして、その子舩山の三男）、末吉保馬

である。留学の期間は二年間で、一八八一（明治十四）年末に帰国して全員が参謀本部付となっている。翌八一年七月の時点には参謀本部、士官学校（東京）、日本全国の各鎮台（東京、仙台、大阪、名古屋、広島、熊本）に赴任し、中国語を教えはじめている。こうして当時の管西局長・桂太郎の主導の下に、陸軍内の中国語教育が整備され、実施されていった。

9　宮島大八　―興亜会からの編入生たち

宮島父子と日中善隣

川島浪速（明治十三年、下等第五級生に編入）、宮島大八（明治十四年、十五歳で興亜会に入学。明治十五年、東京外国語学校に転校）、小田切万寿之助（明治十五年第二年生に編入。宮島大八と同じく米沢藩の儒者小田切盛徳の長男。外交官を経て後に正金銀行副総裁）ら興亜会支那語学校に属していた生徒一九名が転校試験を受け、前節に述べた陸軍清国留学生による欠員を補充する形で東京外国語学校へ編入学した。

興亜会とは一八八〇（明治十三）年二月に創立されたアジア主義的な政治団体である。興亜会の中心的活動は支那語学校の運営にあった。その幹事や会員には、たとえば曽根俊虎、丸山孝一郎（興亜会支那語学校校長、米沢藩の人）、宮島大八の父宮島誠一郎のように旧幕府の関係者によって支えられていた。二年後の一八八二（明治十五）年五月には財政上の理由で閉鎖となり、そこで教鞭をとっていた清人教師張滋昉と在籍の生徒一九名が東京外国語学校漢語学科へと移籍された（興亜会支那語学校については、『興亜会報告・亜細亜協会報告』［黒木彬文・鯵澤彰夫解説、不二出版、一九九三年］及び宮島貞亮「明治最初の支那語学校」［『東亜事情論文集刊』慶応大学、一九三三年］に詳しい）。

興亜会からの編入生には後年活躍することになる人が少なくなかった。日中交流の歴史にひときわ大きな足跡を残した宮島大八はその一人である。宮島大八とその父宮島誠一郎とがいかに中国と深い交わりをするようになったかその端緒をここで述べることにする。

日清修好条規に基づいて一八七四年に日本は北京に公使館を開設し、清国も一八七八年に東京に公使館を開設した。清国は初代の駐日大使として何如璋を任命し、副使には張斯桂、参贊（参事官）には黄遵憲があった。この人々は文人官僚であったために、清国公使館には日本の漢学者や文人たちが頻繁に出入りしていた。一八八一年何如璋に代わり、二代目公使黎庶昌が着任した。この時、張裕釗（張廉卿）の長子、張伉が随員として来日した。黎庶昌は日本の親中国派宮島誠一郎と親睦を深めることになる。誠一郎は長男の大八を当時直隷省の首府、保定の蓮池書院に主講となっていた張裕釗に門人として迎えてもらうように依頼した。蓮池書院とは、直隷総督となった李鴻章が設けた書院で、国家の再興を担うべき人材の育成にあたっていた。張裕釗はこの時面識もなかった誠一郎に「張廉卿先生書蘇東坡詩幅」と『簾亭文集』を贈り、黎庶昌の外交の成功を助けている。

宮島父子は日中交流史上に今もその名を残すが、漢籍の教育を受けて中国文化を深く理解し、子の大八に影響を与え、さらなる夢を託して中国との連携の道を歩ませたのは父の宮島誠一郎であった。

宮島誠一郎は米沢藩の藩校興譲館の助教に二十九歳で就任し、勤王の大義の下、奥羽列藩同盟成立に尽力した。その建白書の草案で、大局的見地から戦争を回避し、和平へと導く自説を述べて東北諸藩の重臣の賛同を得、副使として江戸に到着、勝安房（勝海舟）と折衝して添削を仰ぎ、英国船アルビヨン号に乗船、横浜から兵庫に向かった。京都にいた土佐藩主山内容堂の手を経て、ついに建白書を朝廷に進達する重責を果たした。勝海舟に兄事することは生涯続き、誠一郎のアジア観には勝海舟の影響が多分に見られる。誠一郎は一八七〇（明治三）年待詔院下院出仕となって、明治政府官界に登場し、一八九六（明治二十九）年には貴族院議員に勅撰された。一八八〇（明治十三）年の興亜会の設立と以後の活動に誠一郎は深く関与している。この興亜会支那語学校で大八は中国語を勉強することになるのである。大八の能筆は幼児期に祖父一郎左衛門吉利について欧陽詢の臨書を課せられたことによる。祖父は米沢

藩三手組五十騎の長手御槍組頭（二百石）であり、また御筆吟味方を勤め書道に通じていた。一八八五（明治十八）年東京外国語学校が廃校となって東京商業学校に吸収されたことに宮島大八は激しい怒りを覚え、同級生とともに退学し、清国留学の渇望にかられる日々を送っていた。大八が清国留学を決意する契機となったのは誠一郎に贈られた「蘇東坡詩幅」と『廉亭文集』との出会いであり、そのことを大八は次のように追想している。

「当時私は十七歳であったが、その書を見て非常に愉快に感じ、又その文集中の黎氏に与うる書を読んで大いに感動してしまった、直ぐに渡支、廉卿入門の覚悟を決めたのです。二十一歳の時であった。」（詠翁道話）

父誠一郎に渡清を認められ、二十一歳の大八は一八八七（明治二十）年四月、黎庶昌の紹介状を携えて保定の蓮池書院に向かった。大八は張裕釗の許において自己形成を行った。後年大八は官の禄を食むことをせず、政界の助言者としての立場を守って自宅に詠帰舎（一八九五［明治二十八］年五月開設。後の善隣書院）を経営し、日中善隣という堅実な偉業達成につなげた。これは、師の張裕釗が後期において幽居遁世を志しながら、なお世事外交に冷徹な思慮をめぐらし心を熱くしていたことに相通じるものがあるといわれる。一九一九（大正八）年、第一次大戦のヴェルサイユ講和会議において牧野伸顕が発議した「世界人類平等決議案」は宮島大八の助言に基づくものであったことは今もエピソードとして語り継がれている。宮島大八の墓は米沢市の信行寺にある。

10　明治初期の中国語教科書の系譜

『語言自邇集』と『漢語跬歩』

外務省漢語学所の初級教本としては、『漢語跬歩』『小孩児』『二才子』『鬧裏鬧』『訳家必備』など唐通事の使用し

た写本が使われた。

東京外国語学校で書写して使用されたトーマス・F・ウェードの『語言自邇集』を底本として、一八八〇（明治十三）年には北京官話の教科書の刊行が完結、広部精編『亜細亜言語集　支那官話部』（全七巻）となった。その訳である広部精編訳『総訳亜細亜言語集　支那官話部』（全四巻）の内、巻三まで刊行されたのが同年八月。興亜会支那語学校編『新校語言自邇集　散語ノ部』（同年四月）、慶応義塾出版社刊『清語階梯語言自邇集』（同年七月）と続いた。これらは皆トーマス・ウェードの『語言自邇集』の翻刻本ではあるが、編者らの北京官話学習の成果であり、東京外国語学校の北京人教師薛乃良等の意見をいれて字句の改変、校訂なども行っている。声調の符号表示、有気無気の符号表示、発音のカタカナ表記などにもさまざまな工夫が見られ、支那語の普及に大いに貢献した。編者の広部精は一八七六（明治九）年十二月に東京銀座尾張町に日清社を開設して支那語（日清社では南京官話、のち日清館では北京官話）を教えた（翌七八年八月閉社）。

御幡雅文編『華語跬歩』（一八八六年）は、東京外国語学校の南語科で使用された『漢語跬歩』（四巻、外務省刊）に依拠しているが、この『漢語跬歩』は、実は分類配列をとった島津重豪『南山俗語考』（全五巻附一巻）を底本にしている（前述）。御幡雅文の事績については後述する。

呉啓太・鄭永邦著『官話指南』（上海美華書館、一八八一〔中国暦光緒七〕年十二月序）は在北京の日本公使館での教育用に編まれたもので、「重念」（ストレス・アクセント）がはじめて日本で明記された教科書である。これは前述の如く、川崎近義によっていち早く発見されたものではあったが、本書によって一般に知られることになった。英仏語の対訳本もある。御幡雅文編『華語跬歩』にも、谷信近著『支那語独習書』（一八八九年）にも、同じく「重念」の表示があって、以後刊行される教科書の発音表示の規範となっていった。文中の休止（ポーズ）の置き方の表示は

呉大五郎・鄭永邦著『日漢英語言合璧』（一八八八年）においてなされる。沼田正宣著『日清会話自在』（一八九三年六月）には軽声表示がある。

右に述べた北京官話の教科書は、いずれも音声記述に最大の努力が傾けられている。編著者たちは川崎近義に学んだ先輩後輩の間柄であって、こうした北京官話教本にみられる分析的記述の深化は唐通事の経験的教学法を脱しており、北京語に対する科学的認識においてはるかに前進していたと言っても過言ではない。

11　明治期隆盛の頃の東京外国語学校

漢語学科の授業内容

一八八一（明治十四）、八二年の頃の学生数は仏語学科一二〇名、独逸語学科一一四名、露語学科五四名、漢語学科四五名、朝鮮語学科二七名、合計三六〇名であった。生徒の平均年齢十七歳。一八七四（明治七）年以来六か年間仏独魯清の言語が教授されてきたが、一八八〇年三月には朝鮮語学科が増設された。

無名氏著「松籟」（『東京外国語学校　校友会雑誌』一九〇六年五月）では執筆者自らを老いた松にたとえて、外国語学校の来し方を語り、現在を見つめ、さらに行く末に思いを馳せるという形式で記されている。長屋順耳著「東京外国語学校沿革史論」（『東京外国語学校沿革』東京外国語学校篇　一九三二年）と好一対をなす文章である。二篇の文には、日本の対外拡張主義と同化政策へと同じく急速度に向かう時代にありながら、胸中にある共通の平和へ思いが静かな語り口で述べられていてともに読者に深い共感を誘う。その「松籟」記述によれば、「明治十四五年の頃は語学校隆盛の時代にて……昔の開成学校生徒の如く年輩のものは少なかりしが、語学校生といへば当時の学生社会に

重きをなし神田の書生は語学校生徒が代表し本郷の学生は医学部生徒の率ゐたるものなりき」とある。

この頃、露漢朝鮮の三語学科では給費生の制度があった。「露漢朝鮮ノ三語学科ニ在リ優等ニシテ資力ナキ者アル時ハ其願ニヨリ人員ヲ限リ特ニ学費ヲ給スルコトアルベシ」（『東京外国語学校一覧　明治十三、十四年』）とある。給費金額は一か月五円以下（ちなみに当時の授業料は一か月二円）。一八八四（明治十七）、八五年度では、「褒賞給費生」と「補助給費生」を設けて、各語学科にまでこの給費制度を拡大している。

つぎに、『東京外国語学校一覧　明治十六、十七年』（一八八三、八四年度）によって当時の漢語学科の教員と生徒及び履修概要を見ることにしよう。

穎川重寛　（教諭、漢語学）
関桂林　（清国教員、漢語学）
張滋昉　（清国教員、漢語学）
川崎近義　（助教諭、漢語学）

教員の張滋昉は、鱒沢彰夫によれば

道光己亥（十九）年十一月、順天府大興県に生まれ、国士監南学に学ぶ。明治九年副島種臣と交際を結び、また曽根俊虎の中国滞在［明治九年二月―十一年一月］中に北京官話を教授する。明治十二年春来日し長崎に滞在。十三年春東京に至り、曽根俊虎宅に寄寓。二月、興亜会支那語学校講師に就任、一時期［十三年九月―十一月］、慶応義塾支那語科講師も勤め、十五年五月十四日興亜会支那語学校閉校にともない、同月文部省東京外国語学校漢語学講師に転ず。十九年同校廃校により退任。二十二年より二十七年迄帝国大学文科大学漢語学講師、二十三年文部省東京高等商業学校嘱託支那語学講師を歴任する。初代琳瑯閣主人の回想によれば、日清戦争後帰国したという。……張滋昉は、日清戦争以前の十五年間余りの長きにわたり、日本の中国語教育を支えた中国人中国語教師であった。

（「興亜会の中国語教育」『興亜会報告・亜細亜協会報告』不二出版、一九九三年九月）

と述べられていて、その貢献を高く評価している。

生徒は一年生は九名、二年生は一〇名、三年生は一八名、四年生は七名、五年生は四名の計四八名であって、宮島大八、川島浪速（三年生）、金森（速見）一孔（四年生）などの面々が各学年に在学していた。一八七七（明治十）年九月以来漢語学の上等生には英語学科が兼修されていた。

東京外国語学校の授業科目は、外国語教育を中心としながらも、簿記や代数、幾何、体操を加えるなど次第に近代的教育の形式を整えはじめた。当時の学科名は東京開成学校のそれと比較しても大差はない。たとえば東京開成学校の諸芸学校では予科一年下級の場合、博物学、科学、物理学、算術、幾何学、罫画、代数学、文典書取、作文、歴史、地理学、暗誦、読方、会語のような学科があった。

中国語の学科目のなかで最も重点が置かれているのは「授音」「授語」である。これは中国人教師の授業である。講義を入門の段階から上級の課程に至るまで聞かせて、発音指導から中国語の基本文型の理解、単語力の増強、高度の内容を盛った文連続やテキストの理解までをその音声を聞かせることによって習熟させ、中国語を習得し、話すことができるようになるためであった。文字言語として慣れ親しんできた漢文を外国語として学習するには今と変わらず相当な時間を要した（科目名の下の数字は一週の時間数）。

漢語学

	第一年	第二年	第三年	第四年	第五年
	第一期第二期	第一期第二期	第一期第二期	第一期第二期	第一期第二期
習字	6　3	3　3	3		

授音	6	3	3	3	3	6	6				
授語	6	6	6	6	6	6	6				
算術	5	5	5	5	5						
修身学	1	1	1	1	1	1	1				
皇漢書	5	6	6	6	6						
体操	3	3	3	3	3	3	3				
句法		5	5								
話稿				4	4	2	2				
翻訳				1	1	1	1				
解文						2	2	2	2	2	2
記簿法								1	1	1	
代数								3	2	2	3
幾何								2	3	3	3
英語								5	5	5	5

授業の内容と用いられたテキストについては以下のようである。

「習字」には『詩韻輯要』、「授音」即ち漢語の口語の発音練習には『三字経』『孝経』、「授語」即ち単語やフレーズの練習には、南語には『漢語賭歩』、北語には『語言自邇集』が使われ、進んで「話本」「稗史」が用いられ、南語では『今古奇観』、北語では『紅楼夢』が用いられた。「翻訳」では散文体の訳題、吏牘体の訳題が課された。皇漢書とは和漢書のことであり、『日本外史』『文章軌範』『鋼鑒易知録』『明鑒易知録』『史記』『泰西史鑑』『気海観瀾広義』『英氏経済論』が用いられた。「解文」即ち解釈には『福恵全書』『文件自邇集』が用いられた。補習用として南語科

では『二字話』『三字話』『小学生』『小孩児』『請客人』『医生通話』『鬧裏鬧』『養児子』『二才子』『瑷浦佳話』『稗史三国志』『水滸伝』『列国志』、北語科では『正音咀華』『眉前浅話』『伊蘇普喩言』『聖諭広訓』『清文鑑』が使われた。翻訳解文科では『清会典』『明律』『清律』『資治新書』『留青新集』、作文科では『尺牘双魚』『酬世錦嚢』が使われた。

漢語学科必修の英語は第四年第一期で習字綴字読法訳読（テキストはウイルソン著『大綴字書』『第一読本』）、第四年第二期で書取、綴字、綴文、会話、暗唱、読法、訳読（テキストはウイルソン著『大綴字書』『第二読本』、ハーテル著『会話篇』）、第五年第一期になると書取、文法、作文、地理、大意講義、読法、訳読（テキストはスイトン著『語学書』ハーベル著『地理書』『博物初歩』）、第五年では読法、訳読、文法、作文、歴史講義（テキストはスイトン著『語学書』『博物初歩』、バーレー著『万国史』）のごときカリキュラムになっている。漢語科の生徒に第二外国語として兼修させた一週五時間の英語の学習は相当な学力をつけたものと推測される。

12　東京外国語学校の廃校

森有礼の中国体験と廃校

一八八四（明治十七）年三月二十六日、東京外国語学校附属の高等商業学校が設置される旨文部省より発令された。翌八五年八月仏独二語学科の教員と生徒は東京大学予備門へ転学移籍、同年九月二十一日、東京外国語学校とその附属高等商業学校、それに森有礼の創設になる商法講習所に淵源する東京商業学校の三校が合併して、新しく旧東京外国語学校跡に東京商業学校が成立した。ここに東京外国語学校は事実上廃校となった。旧東京外国語学校は露漢朝鮮語学科を第三部とした。第三部の生徒は、一年から五年まで合わせて、露語一八名、漢語四四名、朝鮮語二三名。

旧東京外国語学校の外国人教師の清国人張滋昉は第三部漢語学教師として勤務。この時点で東京外国語学校の漢語学科卒業生は四名。翌八六年一月には第三部を語学部（二年制）とする。同年二月語学部を廃止。一八七三（明治六）年に設立された東京外国語学校は合併後わずか五か月で廃校となった。その間一二年間であった。

本校の解体に継ぐ廃校に至る経緯については『商業教育の曙』（上巻　細谷新次著、下巻　如水会学園史刊行委員会編）に詳述されているので、まずその論考を参照されたい。

解体・廃校は森と大木により計画、実行されたものであった。駐英公使森有礼は一八八四（明治十七）年四月十四日帰国後、伊藤博文の推薦により文部省入りした。この時の文部卿は大木喬任であり、森は「文部副卿」の地位にあって教育行政に関与した。森とは旧知の間柄の明治期の革新的実業家三人、即ち渋沢栄一、益田孝、富田鉄之助が名を連ねてこれに協力した。当時の校長、内村良蔵（明治十年一月より在職。米沢藩の出身）は、辻新次の配下の文部省官吏であり、廃校の経緯については黙して語ることはなかった。「外国語学校存廃ノコト」と題する大木喬任の次のメモが残されていて、これにより周到に計画が練り上げられたものであることが分かる。

今二校ヲ合併スルニ当リ此ニ特ニ審議ヲ要スベキモノハ東京外国語学校ノ存廃ノ事ナリ、元来該外国語学校ハ広ク外国語ヲ教授シ大学其他専門学校ニ入ルベキ生徒ニ必要ナル外国語ノ予備ヲナスヲ以テ其重ナル目的トナシタルモノナリシガ、漸ク其性質ヲ変ジテ一両年前ヨリ其内ニ高等商業学校ヲ置キ商業上ノ学問ト外国ノ語学トヲ兼教スルノ有様トナレリ、故ニ当時ニ在リテ既ニ名ハ外国語学校ヲ本体トシ之ニ商業学校ヲ属スト雖ドモ其実ハ商業学校ヲ以テ旨トセシモノト云ハザルヲ得ズ、況ンヤ頃日ニ至リ仏独両語学ノ如キハ之ヲ予備門ニ移スノ議アレバ、唯其残ル所ハ露語漢語朝鮮語ノ如キ商業上ニ用フルニ非ンバ更ニ他ニ要用ヲ見ザルモノニシテ益々語学ハ商業ニ附属スルノ科業タルニ外ナラザルニ至ルベシ、既ニ其実此ノ如キニ至ルトキハ其名モ亦随テ正サザルヲ得ズ、故ニ東京外国語学校ノ名ヲ廃スルハ今日ニ在リテ止ム可カザルモノトナルベシ。

前掲『商業教育の曙』

露語、漢語、朝鮮語の三種は、外務省の必要からその語学養成機関で修業されたものであった。なぜにこれらを商業の言語と決めつけるのか。森は外交官としての経歴から、アジア外交において三種の外国語がいかに大切であるかを十分に知っていた筈である。

豊富な欧米滞在体験をもつ森ではあったが、初めての中国体験は二十九歳の時であった。森は一八七五（明治八）年十一月十日特命全権大使として清国駐在を命じられ、江華島事件をめぐる対清交渉にあたるため、特務艦高雄丸に搭乗、北京に向かう準備をはじめ、北京に到着したのは翌年の七六年正月四日のことであった。それには東京外国語学校の主任教諭、穎川重寛が三等書記官（通訳）として随行していた。北京の公使館には随行した穎川重寛の他にも、東京外国語学校を卒業して外務省入りし書記見習いの鄭永昌（後に天津領事）とその父、鄭永寧（一等書記官）が職員として勤務していた。森は鄭永寧一等書記官らとともに李鴻章との会談に臨み、欧米一辺倒に染め上げられた森は、李鴻章に向かって、アジア民族の風俗を「下賤野卑」と難じるに至る。森はこの後さらに二度にわたって渡清、北京での公務に従った。その当時、外務省書記見習いとして北京に留学していた中田敬義（後に外務省政務局長）は森有礼を「当時の公使森という人は偉い人であったが、支那では余り振るわなかった。要するに洋学出身で漢籍の素養がなく、年も若かったから支那側から小僧扱いにされて居た。支那では何と云っても漢学の素養がなければ駄目である」と観察している。

東京外国語学校と東京商業学校の「合併」とは言っても、実質は「城明け渡し」にも似て、この強行な処置に対する学生達の動揺と怒りはその極に達した。「満蒙独立運動」を挙行しようとしたことで名高い川島浪速もこの廃校に遭遇した。その川島は廃校時の心境を以下のように述べている。

講習所から来た学生が本当の子供の様で、語学校より引続いた学生は継子扱ひの勢となり、俺共初め従来の学生が感情的に不平満々であつた。……矢野校長が俺を呼び出して「何故退校をするか？」ときくから「支那へ渡る心算だ」というたら「何か行つた先の仕事が定つておるか？」ときくから「そんな宛は少しもない。唯大陸の有らん限りは跨にかけて歩く心算だ」と答へた。……然るに俺は箆棒に大きな空想が腹の中に満ち満ちておつた時で、親に対しては実に気の毒に堪えられなかつたが、国家の為めだと云う様な考へから人情を殺して支那へ向かつた……愈々船に乗つて横浜を出帆する時、俺は胸中感慨無量で、甲板の上に立つて東京の空を拝み、心の中に血の涙を流して両親に謝罪と暇乞ひをして行つたのである。

（会田勉著『川島浪速翁』、大空社、一九九七年）

外国語学校から商業学校に移り、卒業して実業界に進んだ者には文部大臣になった平生釟三郎（露語学科）をはじめ、後年社会に出て活躍する人材が少なくなかった。漢語学科では、上海総領事から横浜正金銀行取締役になった小田切万寿之助がいる。露語学科の助教諭、黒野義文は廃校後ロシアに渡り、ペテルブルグ大学の日本人講師として数奇な生涯を終えたが、N・I・コンラード、N・A・ネフスキーのような東洋言語学者の育成に貢献した。ネフスキーは一九一五年日本に留学、小樽高商、大阪外国語学校で教鞭をとり、西夏語の研究を続行した。

廃校後一二年に亘る空白の時代があった。森亡き後、日清戦争を経て東京外国語学校再興の好機至れりと考え、政界の近衛篤麿と学界の加藤弘之等の力を頼み、有力者を組織して再興に向け同窓生の中心となって働いたのが大村仁太郎（明治七年外国語学校独逸学科入学、十三年卒業）である。東洋学者白鳥庫吉（大村の義兄）は次のように述べている（『獨協百年』第二号、一九七九年）。

明治三十年（正確には明治二十九年十一月［執筆者注］）、公爵近衛篤麿が大日本帝国教育会長に推戴せらるゝや、君は同会幹事となり、公爵を補佐し、其功尠からず。日清役後、同会を糾合して、東京外国語学校復興の事を議し、之が案を立てゝ、貴衆両院に提出せしめしに、卒に通過し、明治三十一年文部省は之を復興したり。今の東京外国語学校の由りて起り

し所以は、実に君が悃愊（まごころ）にして真摯なる誠意と其尽力とに由るなり。

明治の学制・教育史からすれば、東京外国語学校は「再興」されることになるのだが、文部省の立場からは「創立」であった。本学は高等商業学校附属外国語学校として再興されるが、その後「独立」に至るには、同窓会による運動へと結集し、文部省関係者への陳情となってようやく実現されたものであったことは当時の同窓会報の伝えるところである。

13　再び長崎へ　―中国語教育の復活

長崎での中国語教育の復活

東京外国語学校の漢語学科は、中国語教育の中心的存在であった。東京外国語学校を合併、改称した東京商業学校では中国語教育が廃止された。この中心の消滅というべき事態は中国語教育の全国的衰退を招いた。

この時東京大学ではどのような状況であったろうか。東京大学でははじめ「和漢文学科」を置き、一八八二（明治十五）年には「古典講習科」を置いて、翌年にはこの古典講習科を分けて国書課と漢書課とし、漢書課では中国の古典を専修せしめた。東京大学は一八八六年の帝大文科大学の発足後も哲学、和文学、漢文学、博言学の四学科から出発して以後次々と学科を増設していった。

一八八六（明治十九）年に帝国大学文化大学博言学科には「支那語科（俗語）」の科目が設けられた。八九年には漢文学科が漢学科と改称され、九三年九月には講座制が設置され、漢学科に支那語学が置かれた。ここに中国語を言

語科学の対象と考える基礎が創られ、平成の現在までその態勢は続いている。だが、帝国大学での支那語学は各種ある現代語や古典語と等位の位置づけにあって、研究対象とはなっているが、中国語を教える教授スタッフも一人ないし二人と極めて少なく、多数の学生に中国語を教育する機関とはならなかった。研究成果が出てくるのも後年のことである。旧東京外国語学校漢語学科教諭の張滋昉が帝国大学の文科大学から支那語の授業を嘱託されたのは、一八八九（明治二十二）年文部大臣森有礼死去（二月）から七か月後の九月のことであった。張滋昉は日清戦争（一八九四年八月始まる）直前まで教鞭をとり帰国した。その後、一八九五（明治二十八）年一月からは引き継いだ宮島大八が文科大学で支那語学を教授した。宮島は後に東京外国語学校の再興とともに母校の講師に迎えられる。森有礼によって更迭された加藤弘之が帝国大学総長に返り咲き（一八九〇年五月）、森の見下していた支那の言葉、支那語が帝国大学で張滋昉の授業として復活したのもまさに森亡き後の動きであって、本学が再興へと向かう胎動もこの頃から始まるのである。

東京商業学校での中国語教育の廃止後、公教育では一旦幕を閉じたかに見えた日本の中国語教育も長崎において蘇る。中国語教育は再び唐通事たちのふるさと長崎で命脈を保つことになるのである。

一八八二（明治十五）年長崎中学校は清語学部を設けた。すなわち、前身の広運学校は、明治元年長崎興善町元唐通事会所跡に設立され、国学と漢学と洋学が教授されていたが、一八七四（明治七）年四月新たに長崎外国語学校として発足し、同年十二月には長崎英語学校と改称し、一八七八年には県立長崎中学校となって県に移管された。このとき英語学部とともに清語学部が置かれたのである。一八八二（明治十五）年、この長崎中学校は長崎外国語学校と再び改称して清語学部を存続。八五年清語学部を漢語学科と改称。同年長崎外国語学校は廃止されて公立長崎商業学校となる。さらに翌八六年には県立長崎商業学校となった。合併に伴い、外国語学校の在学生はほとんどがこの県立

商業学校の本科生となり、英語部清語（漢語）科を設け、商業科目を兼修した。日本の中国語教育はこの長崎商業学校で存続されていくのである。その後、この長崎商業学校は県より長崎区（市制実施により一八八九年には長崎市となる）に移管され「市立」となった。前述の神代延長は、一八八〇年には東京外国語学校を辞職した後故郷にもどり、こうした学校で教鞭をとったのである。

御幡雅文は、一時期、この長崎商業学校に奉職している。御幡雅文は、享保年間「和中の華客」と謳われた同郷人、岡島冠山に恥じぬ中国語研究者かつ教育者として生涯を終えた。

御幡雅文は一八五九（安政六）年長崎市新町十四番地に生まる。一八七一（明治四）年上京後、東京外国語学校漢語学科に学び、一八七九（明治十二）年陸軍清国語学留学生となり北京に留学。八二年に帰国。その後五年余り熊本鎮台で中国語の教官を務めた。このとき御幡から漢語の手ほどきを受けたのが荒尾精（後述）や鐘崎三郎（日清戦争で殉難）であった。一八八九（明治二十二）年一月より一時長崎商業学校に奉職、そこで教鞭をとりながら各種中国語テキストの草稿を書いた。中国語商業通信文の嚆矢となった御幡雅文編『官商須知文案啓蒙』（一八八九年、非売品。刊行地は長崎市）はこの長崎商業学校のテキストとして編集された。御幡雅文は、その後上海に渡り、荒尾精の設立した日清貿易研究所（後の東亜同文書院）の設立と運営に協力して中国語の研究と教育にあたり、人材の養成に尽くすことになる。

14　長崎から上海へ　―荒尾精と御幡雅文

東亜同文書院と御幡雅文

「興亜の先覚志士」と称された荒尾精（一八五九［安政六］年生―一八九六［明治二十九］年病没。号は東方斎）は、上海にあった東亜同文書院の母体ともいうべき日清貿易研究所を開設し、明治維新後の日中関係を開拓した先駆者であった。

明治政府による日清の国交は、イギリスがアヘン戦争後清国との間で結んだ南京条約（一八四二年）による上海開港に遅れること約三〇年後の一八四一（明治四）年の日清修好条規により樹立された。上海は、開港を契機に東アジア最大の都市に発展して近代中国の歴史は激変したが、日本は清国と対等な貿易関係を結んでいたから、市場において欧米列強と競争するには不利な立場に置かれ、通商貿易の上で大きな進展をみることなく取り残されていた。荒尾と根津は当時の日本において清国問題の重要性をいち早く認識して、清朝の内政や軍事について情報の収集を行い、市場としての中国の可能性に注目して実践に移した先覚者であって、日清戦争以後、両国の関係が変化し、東亜同文会の結成、東亜同文書院の開設に至るのは、荒尾精や根津一の考えが近衛篤麿によって結集されていったからにほかならない。

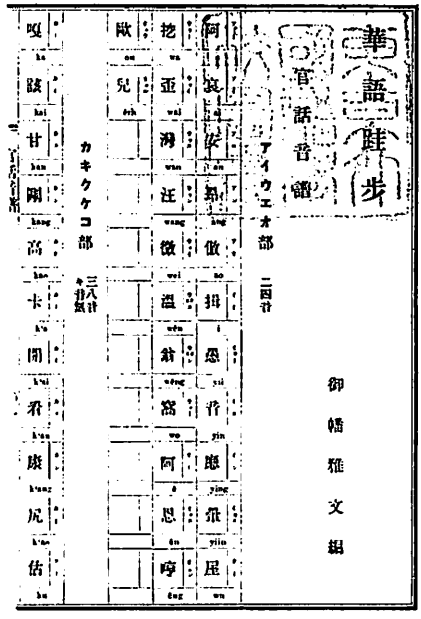
荒尾精は尾張徳川家の城下町、名古屋に生まれた。外国語学校に入りフランス語を学び、一八七八（明治十一）年には中退、一八八〇年陸軍士官学校に入学（旧五期）した。そこで盟友となった根津一（後の東亜同文書院院長）と出会う。一八八二（明治十五）年に士官学校を卒業、一八八三年、陸軍少尉として熊本の第十三連隊に赴任する。こ

の熊本の地で、荒尾は陸軍省派遣将校として清国に留学し、帰国後第十三連隊に中国語教師として赴任していた御幡雅文と親交を結ぶことになる。荒尾は御幡と官舎で起居をともにして、暇を見つけては御幡に中国語を習ったという。

一八八六年陸軍中尉荒尾精は中国へと派遣され、岸田吟香の漢口楽善堂を拠点に調査活動に従事、一八八九（明治二十二）年四月帰国。参謀本部に清国の実情を伝える帰朝復命書を提出し、「亜細亜振興」のための中国の改革を提唱した後は、将来の日中貿易の担い手となる人材を養成する学校、日清貿易研究所の上海設立に奔走する。ここで盟友、根津一（一八六〇－一九二七。甲州山梨日川村出身。号は山洲）と設立計画を進めた。荒尾精と根津一との友情関係を示す興味あるエピソードが残されている。荒尾が戸籍上の名前である「義行」から「精」に改めたのは、根津の「一」に合わせて、中庸章句序の中の「人心惟れ危ふく、道心惟れ微なり。惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執れ」から取ったものであったという。

一八九〇（明治二十三）年九月、荒尾は日本全国から集めた学生一五〇名とともに上海に到着、英租界競馬場近くの研究所において開校式を挙げた。所長荒尾精、所長代理根津一。中国語教育スタッフとしては御幡雅文、草場謹三郎（御幡雅文の下級生。同じく陸軍清国派遣語学留学生）があった。三年後、日清貿易研究所は運営資金不足のため九三年閉鎖を余儀なくされるに至る。その後、荒尾は日清戦争の終結の後台湾に赴き、九六年十月ペストに罹って死亡。根津はその悲報を京都で聞くことになる。

その後、荒尾精の開学の精神を継承して、その前年に設立された南京同文書院を吸収し、根津一が院長となり、東亜同文書院と改称されて一九〇一（明治三十四）年上海に開設されるが、それは日清戦争で日本が勝利し、一八九五年四月に下関条約が調印された後のことであった。日清戦争以後、日本は欧米諸国並みに特権を得て貿易は増大していった。東亜同文書院を経営したのは近衛篤麿（公爵。貴族院議長。一八六三－一九〇四）が結成した東亜同文会で


華語跬步
官話音韻
御幡雅文編
アイウエオ部
二四音
カキクケコ部
三八音
天文類
地輿類

「華語跬步」

あり、近衛は会長であった。近衛は南京に赴き、清国両江総督の劉坤一と会見し、中国に活躍する人材養成のための学校設立について快諾を得た。第一期東亜同文書院学生は一九〇一年に入学した。東亜同文書院は日本の大陸発展の重要機関として、以後一九四六（昭和二十一）年の閉鎖に至るまで続いた。

御幡雅文は、東亜同文書院の開校当初にも中国語教師として任にあたっている。御幡雅文は、早くも一八八六（明治十九）年、二十八歳の夏には主要著書となる『華語跬步（未定稿）』を活版により出版した。発音を重視している点に配慮と工夫がみられ、声調、有気、無気、重念（ストレス）に符号が付けられるなどここにおいて教科書として完成の域に達している。これをはじめとして、次々と先駆的な中国語テキストを刊行して、中国語研究を発展させていった。『華語跬步』は一八九〇（明治二十三）年八月には上下二冊本として定本（日清貿易商会刊）になった。この教科書は版を重ね、一九〇三（明治三十六）年には東京の文求堂から東亜同文会蔵版として刊行され世に普及した。

さらに『増補華語跬歩』（一九〇四年九月）では菊判三五〇ページの大冊となっている。

『滬語便商』は御幡雅文が『華語跬歩』の定本化の後、一八九二（明治二十五）年九月（序文の日付）に刊行したものである。これは日清貿易研究所のあった上海の言葉を習得するため、御幡雅文の編集による明治になって最初の上海語の学習書として名高い。御幡雅文は後に児玉台湾総督の起用を受け、台湾総督府に任官、在職数年、『暨務必携　台湾散語集』（一八九六年）を出版している。一八九八（明治三十一）年からは三井洋行（三井物産上海支店）に勤務の傍ら東亜同文書院で北京官話と上海語を教えた。その他の著作には『清語字彙』（一九〇〇年）、『生意筋絡』（一九〇三年）など教育者的良心の窺える優れた著書を残した。一九一二（明治四十五）年三月郷里長崎にて没す。享年五十四歳。

15　資料と文献

資料と文献について

本稿では表題に掲げたように、明治初期の本学の中国語教育を担った穎川重寛を主とした長崎唐通事の系譜を中心に、「南語（南京官話）」から「北語（北京官話）」へと転換を図っていった漢語学科の推移を当時の歴史の流れに沿って記述してみた。これによって、絶えることなく続いた唐通事の血脈の中で伝授されていた「南語」の実体も明らかになった。ここでは言語学的記述は最少に留めたが、東京と長崎の図書館を訪ね、本稿で言及したものを含め唐通事教本二〇種に目を通すことができ（『二才子』一種のみ発見できなかった）、そこに反映された言語の性格についての基本的理解が得られた上で、筆者の専門とする言語学の立場から「南語」と福州語や南京語との関連を述べること

ができた。

穎川重寛をはじめとする唐通事の事跡の記述については筆者の幾度かにわたる長崎と鹿児島での調査によっている。調査のご協力を賜った長崎市立博物館原田博二館長及び長崎県立図書館の関係各位、興味深い唐通事の話や昔に遡って詳しく縁戚関係を聞かせて下さり、資料や写真等を貸与下さった穎川重寛のご子孫、ご親戚筋にあたる岩崎研吉氏、金井俊睦氏、松尾武彦・奈津子夫妻には特にお礼申し上げたい。

筆者の研究の過程で、鄭幹輔と穎川重寛の碑は戦前に拓本にされて長崎市立博物館に保存されていることを知ることができた。原田館長並びに地元関係諸氏のご好意とご協力により、貴重な拓本は最新のコンピュータ画像処理技術を用いて複製され、旧外国語学校百二十五周年記念を祝して本学に納められた。

鄭成功の弟七左右衛門の後裔である福住信邦氏とご親戚の福永朱洋氏からは興味深いお話をうかがい貴重な資料の貸与をうけた。心からお礼申し上げる。

本稿の執筆にあたっては、数々の先行研究から多大の恩恵を蒙っている。鱒沢彰夫氏の労作『明治以降の中国語教育史の考察』（一九八九年度早稲田大学大学院文学研究科提出修士論文）には裨益されること大であった。陸軍清国留学生の帰国後の動向、明治期中国語教科書の系譜関係（特に『漢語跬歩』が『南山俗語考』を底本としているとの指摘）、御幡雅文の著作についての記述等は鱒沢彰夫氏による研究成果であって、これらを利用させていただいたことに深く感謝を申し述べたい。また川崎近義の事績については、鱒沢氏の論文「北京官話教育と『語言自邇集　散語問答　明治十年三月川崎近義氏鈔本』」（『中国語学』第二三五号、一九八八年）に依った。筆者自身も川崎近義の眠る谷中の墓地には幾たびも足を運び、この不世出の言語学者を偲んだことである。